

42517

教科書文庫

4
810
44-1933
200030 2109

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

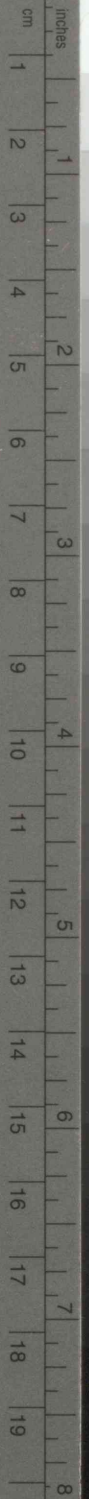


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Fu26
資料室

國文
實業
學校用
卷八



資料室

375.9
Fu26

文部省檢定

實用國語教科書 昭和八年十二月五日

富山房編輯部編

國文

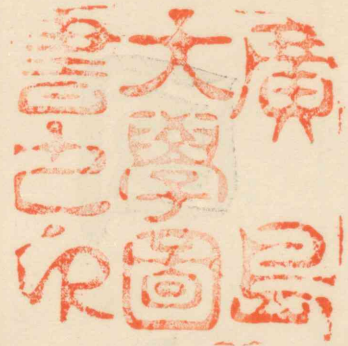
實業
學校用

東京
合資會社
富山房發兌

國文
實業
學校用

東京
合資會社
富山房發兌

富山房編輯部編



國

文

實業
學校用

卷八 目次

一	家居のさま	吉田兼好	一
二	生活の基礎	木村泰賢	六
三	町人諭吉(自修文)	太田正孝	三
四	秋風の歌詩	島崎藤村	三
五	十六夜日記	阿佛尼	四
六	銀の猫	上田秋成	元
七	方丈記その一	鴨長明	三
八	うたかた		三
九	安元の大火		元
十	治承の辻風		四〇

目次

一 淵源	...
二 淵源	...
三 淵源	...
四 淵源	...
五 淵源	...
六 淵源	...
七 淵源	...
八 淵源	...
九 淵源	...
十 淵源	...
十一 淵源	...
十二 淵源	...
十三 淵源	...
十四 淵源	...
十五 淵源	...
十六 淵源	...
十七 淵源	...
十八 淵源	...
十九 淵源	...
二十 淵源	...



國文 實業 卷八

(一)鎌倉時代の文學者歌人京都の正平五年二月六十八(寂)年

つきくし

むかしおぼゆ

...

一 家居のさま

家居のつきくししくあらまほしきこそ假のやどりとは思へど、興あるものなれ。

よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、ひとときはしみくしと見ゆるぞかし。

今めかしくきらかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心ある様に、すのこ、すいがいのたよりをかしく、うちある調度もむかしおぼえてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

多くのたくみの心を盡して磨きたて、唐の日本の珍しくえならぬ調度ども並べ置き、前栽のくさ木まで心のまならず作りなせ

一 家居のさま

さてもやはなが
らへ住むべき

さき

(一)第九十代龜山天
皇の第十一皇子
性惠法親王

るは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき、ま
た時の間の烟ともなりなんとぞ、うち見るよりも思はるゝ。
おほかたは、家居にこそ事様は推しはからるれ。
後徳大寺の大臣の、寢殿に鳶あさせじとて繩を張られたりける
を西行が見て、鳶のゐたらん何かは苦しかるべき。この殿の御心、さ
ばかりにこそ。とて、その後は參らざりけると聞き侍るに、綾小路の
宮のおはします小坂殿の棟に、何時ぞや繩を引かれたりしかば、か
のためし思ひ出でられ侍りしに、まことや、烏のむれゐて池のかは
づをとりければ、御覽じ悲しませ給ひてなんと人の語りしこそ、さ
てはいみじくとこそおぼえしか。後徳大寺にもいかなる故か侍り
けん。

神無月の頃栗栖野といふ所を過ぎて、或山里に尋ね入る事侍り

(二)京都市東山区山
科の栗栖野

しに、遙かなる苔の細路を踏分けて、心細く住みなしたる庵あり。木
の葉にうづもるゝかけひのしづくならでは、つゆおとなふ者なし。
閑伽棚に菊紅葉など折散したる、流石に住む人のあればなるべし。



栗栖野の里
(中村岳筆)

かくてもあられるよと哀れに見る程に、かなたの庭に、大きな
柑子の木の枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたり
しこそ、少し事さめて、この木なからましかばとおぼえしか。

栗栖野
閑伽棚
柑子の木

因果の理
世渡るたづき

桃尻

境に入る

或者子を法師になして、學問して因果の理（いんぐわ）をも知り、説經などして世渡るたづきともせよ」と言ひければ、教のまゝに説經師にならん爲に、先づ馬に乗習ひけり。輿、車持たぬ身の導師に請ぜられん時、馬など迎におこせたらんに、桃尻にて落ちなんは心憂かるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒など勸むる事あらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。二つのわざやうく境に入りければ、愈よくしたくおぼえて嗜みける程に、説經習ふべきひまなくて、年よりにけり。

この法師のみにもあらず、世間の人なべてこの事あり。若き程は諸事につけて、身を立て、大いなる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひてうち怠りつゝ、先づさしあたりたる目の前の事にのみ紛れて月日を送れば、事ごとになす事なくして身は老いぬ。終に物の

上手にもならず、思ひし様に身をも持たず、悔ゆれども取返さるゝ
齡ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。

されば一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、何れか優るとよく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨てて一事を勵むべし。一日のうち、一時のうちにも、數多の事の來らん中に、少しも益の優らん事を營みて、その外をばうち捨てて、大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと心にとりもちては、一事も成るべからず。例へば、碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人に先だちて小を捨て大につくが如し。それにとりて、三つの石を捨てて十の石につく事は易し。十を捨てて十一につく事は難し。一つなりとも優らん方へこそつくべきを、十までなりぬれば惜しくおぼえて、多く優らぬ石には換へにくし。此をも捨てず、彼をも取らんと思ふ心に、彼をも得ず、此をも失ふべき道なり。

懈怠

京に住む人、急ぎて東山に用ありて既に行著きたりとも、西山に行きてその益優るべき事を思ひ得たらば、門より歸りて西山へ行すべきなり。此所まで來著きぬれば、この事をば先づ言ひてん、目をさゝぬ事なれば、西山の事は歸りてまたこそ思ひたゞめと思ふ故に、一時の懈怠、即ち一生の懈怠となる。これをおそるべし。一事を必ず成さんと思はゞ、他の事の敗るゝをもいたむべからず。人の嘲をも恥づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。

二 生活の基礎

木村泰賢

余は原則として、生活には必ず苦痛が伴ふものであると考へてゐる。随つて、いかにして愉快に生活し得べきかといふ事などに就いてはまだ考へた事がない。しかしながら、いかにすれば眞面目

(一)印度哲學者、文學博士、岩手縣の、昭和五年歿、年五十。

月並

で確實な生活を爲し得べきかといふ事に就いては、自分でも始終考へてゐるし、また時には人にも語つた事がある。其所で、今は主としてこの確實生活の根柢に就いて述べてみようと思ふ。確實生活と言つても、別に新しいものではない。要するに、昔から言ひふるされて來た月並的な堅實主義に外ならぬけれども、少くとも余に取つては、この堅實主義は何程か體験的保證があるので、在來の説法以上に、實際的權威をもつてゐるものと信じてゐる。然らば、その堅實主義とはいかなるものか。概括的に言へば、堅實な人格的修養といふ事になるが、自分はこれを三段に分けて考へてゐる。その第一綱領は能力の修養である。即ち自己の職務なり學藝なりに關して、その技能を鍊磨する事である。何時の世でもさうであるが、特に今後の時代は全く實力の世で、一藝一能に達せぬ者は、生きがひのある生活をする事が殆ど不可能である。世にはさし

欺瞞

たる能力もなく、外見上は可なり能力がある様に装うてゐる人もあるが、それは欺瞞であつて、斷じて確實な生活に契合したやう方ではない。次第に競争が激しくなるにつれ、自然に淘汰され、凋落せねばならぬものである。眞に確實な安心な生活をして行く爲には、自己の腕に對する確信が必要である。随つてこれが爲には、何事をするにしても、絶えず自己の腕を磨いて、何時どこに出ても、一本立で行く事の出来る實力を養つて置かねばならぬ。よく求職者の中には、自己の腕を磨く事はせず、徒に何等かの情實的同情をたどつて、良い地位を得ようなどと焦る者もあるが、それは非常な心得違である。いかに情實の世とは言へ、相當な實力のない者に對しては、下から押上げるわけにも行かなければ、上から引上げるわけにも行かないではないか。これに反して、實力さへ確實なら、その人の性格に特別な缺點のない限り、遅かれ早かれ、何時かは必ず芽を

情實的同情

推輓

一生を清算する

ふく時節が到來せずにはゐない。勿論、世に立つて行くには、先輩や、同輩や、後輩の推輓によらねばならぬ。しかし、その根本となるものは、飽くまでも自己の實力である。但し、確實生活の基礎を單に能力一點にあるとのみ考へたら、それは大なる誤謬である。世には可なり實力を具へ、しかも外見上可なりの成功をしてゐる様な人でも、自らその一生を清算してみれば、却つて失敗の生活をしてゐる人が少くない。それは何の爲か。これには種々の原因もあらうが、その大部分は、道德的缺陷の伴なふ爲である。蓋し、道德的缺陷は、外見的成功の大きければ大きい程、その生活に對する暗黒面を構成する事も大きく、絶えずその生活を苦しめるからである。其所で確實生活の第二綱領は、道德的修養を積む事であらねばならぬ。即ち自己の性格を陶冶して、道德的缺陷に陥らない様にす

光風霽月

道德的・二重生活

るのである。但し、道德的修養とは言へ、模範的道德家たれといふ意味ではない。勿論、それは望ましい事ではあるけれども、常人に強ひてこれを求めようとすれば、却つて動もすれば消極的な、しかも偽善を養ふ弊に陥るからである。余の此所に言ふ道德的修養とは、要するに、健全な常識的・道德的判斷を以てして、少くとも平均線以上に出る様にせねばならぬといふ事で、これを消極的に言へば、公的生活は勿論の事、私的生活を公開しても、よしや模範的にはならなくとも、少くとも後めたい所のない程の生活を期する事である。出來得べくんば、自己を天下の照魔鏡に照しても、常に光風霽月の心境に居りたいといふ事である。

これに反して、道德的・二重生活をする事は最も避けねばならぬ。世の中に何が苦しいと言つて、この二重生活をする程苦しい事はあるまい。内と外と、言と行との相反する生活を一身に兼ねて行か

内面生活

ねばならぬといふ事が、どれだけ我等の眞を害し、その勇を挫き、果は常に不安の生活を持來すものであるかは、人々の少くとも多少経験した所であらう。特にその内面生活が一旦暴露されると、その人の地位なり名聲なりが根柢から動搖するといつた様な祕密を有する人の生活は、たとひ外的にはいか程華麗であつても、内的にはいかに不確實であるかは、改めて言ふまでもない。世には綱渡りの様な生活をしながら、それでゐて外見上成功してゐる人もあるので、道德的修養を以て人生の進路に關係しないかの様に思ふ人もないではないが、斯様なのは、眞に生活の奥義を究めない者と言はねばならぬ。

最後に、確實生活の第三綱領は、宗教的信念に安住する事である。由來我等の生活には、種々の不安や苦痛が必然的に伴ふものである。腕があり、德行に不斷の注意を怠らぬ人でも、必ずしも常に幸

必然的

福な生活を送り得ると限つてはゐない。時には意外の不幸に遭つて、悲歎失望の淵に沈まねばならぬ事もある。特に今後生活上の壓迫が益々激甚になり、生存競争の熾烈になるにつれて、劣者は勿論の事、優者と雖も、尙その背後には幾多の苦痛悲哀が附纏つて來るものと覺悟せねばならぬ。かかる場合に於ける最後の慰安光明は、どうしても宗教的信念を措いて他に求める途がないのである。宗教的信念のある者は、いかに生活に疲れても、常に其所に深切な慰安を感じ、一道の光明を認める事が出来る。さうしてこれは、やがて我等の生活に對する偉大な支持となるもので、眞の確實生活は、此所に到つて始めて不動の地位に到達するのである。宗教を信ずる事を老人の退屈しのぎでもあるかの様に考へるなどは、信念と生活との根本關係に對して、まだ眞に知る所がないのに起因するのである。

架説する
歸納する

(一) 經濟學者、政治家、
家、經濟學博士、
衆議院議員、靜岡縣の人。明治十九年生。
(二) 福澤諭吉のこと。
諭吉は教育家、思想家、慶應義塾の創立者。應義は豊前中津藩士。明治三十四年歿、年六十八。
(三) 東京市芝區野人
一般の人民。庶民。

いかに架説しても、いかに論議しても、確實生活の根本と言へば、これ等の三綱領に歸納し得るのである。活動の源泉も、調和の契機も、發展の基礎も此所に置かれるのであつて、生活の要諦は、歸する所、この三綱領の外にはないと思ふ。少くとも余はこの確信の下に自分の生活を規定して、専ら努力してゐるのである。

自修文

町人諭吉

太田正孝

私は、彼自ら口にしたといふ町人諭吉といふ言葉を、大膽にも標題として掲げてゐる。かりそめにも三田の聖人とも言はれる人を、妄りに「町人」と呼んだのではない。それは、彼の最も喜ぶ全人格を表現したものであるからである。彼はどこまでも、市井の野人として、いみじくも生を楽しんでゐたからである。
「町人」といふ語は、素町人といふ語がある様に、とかく卑しい言

町奴
徳川時代に町人
で任侠を重んじ
た人。男だて。俠
客。

人爵
人のさだめた爵
位。官祿。天爵の
對。

(一) 加賀金澤の藩主
前田侯。百萬石
の太守として頗
る勢威があつた。

葉である如くに響く。それは、徳川時代末期の町人たちの無智と
墮落とから來てゐるのであるが、このいはゆる町人の中にも、心
の清い男もあつた。男を賣らうとする「町奴」がそれである。自由で、
囚はれず、邪氣がなく、廣い心持の宿つてゐる人たちである。彼等
には、人爵などをそつちのけにした、原始のまゝの大自然のうち
に生れつゝいた心境があつて、殿様も武士もこはくはなかつた。
加賀様の前に呼出された俳人一茶は、うぐひすや御前へ出て
も同じ聲と、あつさりやつてのけてゐる。それが、本當の野人の心
境である。正しい町人の心根である。諭吉は、その心を以て推しま
なければ、新日本を建設する事は出来ないと思つてゐた。町人と
はおれの様な人間である。おれの様な人間にして、始めて「町人」と
名のり得る。彼は身を以てそれを示さうとしたのである。

「町人」とは、人間らしい人間といふ事である。社會人の事である。
官位、爵祿で飾り立てられたものではない。金錢的名譽で彩られ

たものでもない。



福澤諭吉

維新當時の書生は元氣なものであつた。脛は丸出し、毛むくじ
やらの腕を張る。大道を大跨に歩く。天下無敵が看板。無作法が豪
傑の身だしなみと心得る。そして彼
等は偉人に憧れてゐる。三田の慶應
義塾といふ名が耳にはいる。諭吉を
慕つて田舎を飛出して來る。あつは
れ書生の面目を諭吉に褒められよ
うと、小倉袴に肩怒らして、義塾に参向する。しかし、勝手がまるで
違つてゐるのに驚く。

塾生は袴など穿いてゐない。編の著物に角帯、ぞろりと著流し
である。鬚を伸ばさぬ。髪も刈つてゐる。誠にさつぱりしてゐる。豪傑
書生は自分を顧る。小倉袴に兵兒帶、それもしわくちやである。髪

参向する
まゐりむかふ。
まゐる。

ぞろり

美服を重ね著た

さま。

著流し

袴を穿かない。平
常のいでたち。

冷飯草履 緒なども葉で組
み紙なども巻か
ないそのまゝの
葉草履
方丈 一丈四方。狭い
意味に用ひる。
あつげに取られ
る ひとくあきれて
我をうしなふ

は伸びてゐる。爪には垢が溜つてゐる。
塾にはいる。いかにもよく掃除されてゐる。器物もちやんと整
へて置かれてゐる。綺麗で氣持がいい。さうするには毎日掃除し
なければならぬ。塾生は總掛りで掃除をする。更に一週間に一度
は大掃除をする。塾生は机、夜具、ランプ、炭取など、ありつたけの財
産を外へ運び出す。室の中をがらんとさせる。はたく、掃く、雑巾を
かける。それを諭吉が見廻る。著流しで、尻を端折つて、冷飯草履を
履いてゐる。これを見た漢學塾育ちの豪傑書生はめんくらふ。大
丈夫當に天下國家を掃除すべし。何ぞ方丈の小室をや」と思つて
ゐたから、皆あつげに取られる。しかも、今の世に名を出してゐる
彼のお弟子の政治家や實業家が、皆この業を積んだのである。
諭吉は常に塾生に身だしなみを説く。自らも禮儀作法を重ん
ずる。言語動作を慎む。そして、人の心は同じでないから、自分の思
ふ事を丸出しに言つて少しも遠慮しなかつたら、すぐに喧嘩に

自由人 束縛されない境
遇にある人

分別 かんがへ。わき
まへ

心術 心のよる所。こ
ころだて

元祿武士 諭吉は當時の書
生に粗糞の氣風
のあるのを戒め
て、身だしなみ
を重んじた。元祿
時代の武士な模
範にせよと言つ
たのであらう。
①關西屈指の富豪
當主は男爵鴻池
善右衛門
はうろく(焙烙)
素焼の土鍋。物
をいるに用ひる。

なる。人とつきあふには、物言に氣を付け、失禮なふるまひなどあ
つてはならぬ」と塾生に教へる。町人は自由人である。自由人には
身だしなみが大切である。自由人は禮を知り、序を知り、そしてま
た分別がなければならぬ。
更に諭吉は語を強めて言ふ、苟も立身出世の志ある者は、その
心術を元祿武士とし、その働を小役人素町人にしなければなら
ぬ」と。これこそ、今の世の人にも繰返して讀んでもらひたい文句
である。

今は昔の事である、大阪の鴻池家の門前を、毎日の様に、はうろ
くや、はうろくと呼んで歩く男があつた。番頭さんは、このはうろ
く屋がいかにも勤勉で、且熱心なのに感心して、或日呼止めて、は
うろく屋さん、お前さんも何時までさういふ商賣をやつてゐて
もし方があるまい。わしが御主人に話してあげるから、どうだ、こ

根性
こゝろね
るたて

Motto
標語

の家に御奉公する氣はないか」と言つた。はうろく屋は番頭さんの深切な言葉を喜んだ。が、誠に有難う存じます。何れ私も落ちぶれましたら、他人様の御厄介になりませう」と、あつさりと言つてしまつた。何れ私も落ちぶれましたら」と言つた所に、このはうろく屋の根性が出てゐる。本當の町人としての意氣が見えて嬉しい。

諭吉は言ふ、苟も我が身になふ仕事であつたら、進取一方と決斷して、左右を顧ない事である。しかも、その中に唯一つ大切な事は、いかなる職業を執るにしても、獨立の大義を忘れる事なく、君子の風を存して、大切な場合に臨んで節を屈しない事である。と、獨立自尊の大義は、この精神から生れて來る。いはゆる町人の本當の意味は、この言葉の裡にはつきりと現れてゐる。

諭吉のモットーとする獨立自尊といふ言葉は、彼の一生を貫いてゐる魂の聲である。この意味に於て、獨立自尊即ち町人精神」と

いふ事になる。

諭吉は學生に獨立自尊の義をかう説いてゐる、獨立自尊の一

獨立自尊

福澤諭吉筆蹟

義は、讀書中にこれを解し、先輩の言を聞いてこれを覺り、また塾中の空氣を呼吸して自然に心に得る者もあるであらう。これは、學生として勉強してゐる間にも、日夜實行すべき事であつて、必ずしも後日になつて始めて實行すべきものではない。獨立自尊とは、他人の厄介にならず、また他人に依頼する事なくして一身を處し、我が思ふまゝにこの世を渡るといふ意味である。とかうしてみると、本心に背かなかつたはうろく屋は、獨立自尊の實行者であつた。彼にして若しは、とりもなほさず人間としては落ちぶれた事になる。本心に背

(一) 典型。
(二) 太田正孝著。昭和二年東京寶文館發行。

(三) 詩人小説家。名は春樹。長野縣生。明治五年

かない所に、町人としての面目がある。もとより町人にも器の大
小がある。力の大小もある。諭吉はその偉大な町人のタイプであ
つたのである。
町人諭吉――

三 秋風の歌

(四) 島崎藤村

しづかにきたる秋風の
西の海より吹起り、
舞ひたちさわぐ白雲の、
飛びて行くへも見ゆるかな。
暮影高く秋は黄の
桐の梢の琴の音に、
そのおとなひを聞く時は、

風のきたると知られけり。

ゆふべ西風吹落ちて、

あさ秋の葉の窓に入り、

あさ秋風の吹寄せて、

ゆふべのうづら巢に隠る。

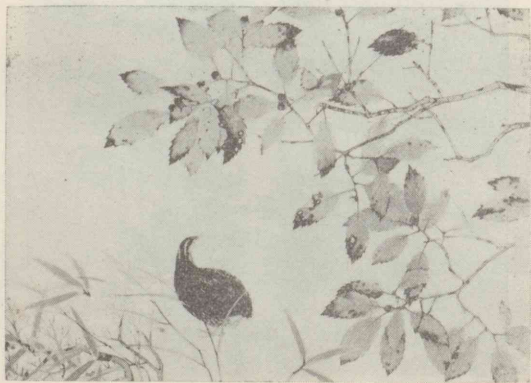
ふりさけ見れば青山も、

色はもみぢに染めかへて、

霜葉をかへす秋風の、

空の明鏡にあらはれぬ。

清しいかなや西風の、



(筆観大山横) らづう

まづ秋の葉を吹ける時、
さびしいかなや秋風の、
かのもみぢ葉にきたる時。

(一) 印度に起つた宗
教の名。佛教よ
りも古く、今も
尙行はれてゐる。

道(一)を傳ふる婆羅門の、
西に東に散るごとく、
吹きたゞよはす秋風に、
飄り行く木の葉かな。

朝あさ羽はうちふる鷺鷹の、
明あけ闇ぐれ天あまをゆくごとく、
いたくも吹ける秋風の、
羽に聲あり、力あり。

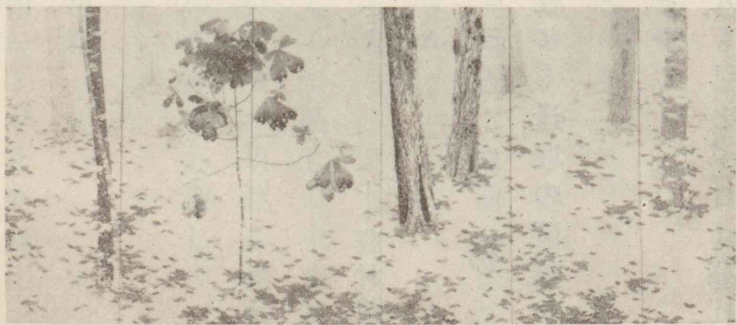


(筆汀春元山) 山大 秋

見ればかしこし西風の
山の木の葉をはらふ時。
悲しいかなや秋風の、
秋の百葉を落す時。

人は利つるぎ劍けんを振へども、
げにかぞふればかぎりあり。
舌は時とき世よをのゝしるも、
聲はたちまち滅ぶめり。

高くも烈し野も山も、
息吹きまどはす秋風よ、



(筆草春田菱) 葉 落

世をかれんとなすまでは、
吹きも休むべきけはひなし。

あゝうらさびし、天地の

壺のうちなる秋の日や、

落葉とともに飄る

風の行方を誰か知る。

—藤村詩集—

四 十六夜日記

阿 佛 尼

(一)鎌倉時代の女流歌人文章家藤原為家の妻。生歿年不詳。

栗田口といふ所より車はかへしつ。程なく逢坂の關越ゆる程に、
さだめなき命は知らぬ旅なれど

またあふ坂とたのめてぞゆく

野路といふ所は、こしかたゆくさき人も見えず。日は暮れかゝり

(二)滋賀縣栗太郡老上村。

て、いともの悲しと思ふに、時雨さへうちそゞぐ。

うちしぐれふる里おもふ袖ぬれて

ゆくさきとほき野路のしの原

こよひは鏡といふ所に著くべしと定めつれど、暮果てて行著かず守山といふ所にとゞまりぬ。此所にも時雨なほ慕ひ來にけり。

いとゞなほ袖ぬらせとや宿りけん

まなく時雨のもる山にしも

今日は十六日の夜なりけり。いと苦しくて臥しぬ。未だ月の光は
かすかに残りたる曙に、守山を出でて行く。やす川渡る程、先立ちて
行く旅人の、駒の足の音ばかりさやかにて、霧いと深し。

旅人はみなもろともに朝立ちて

こまうちわたす野洲の川霧

十七日の夜は小野のしゆくといふ所にとゞまる。月出でて、山の

(一)同縣蒲生郡鏡山村の北にあつた古驛。

(二)同縣野洲郡守山町野洲川の西岸にある。

(三)建治三年(一九三七年)十月。

(四)野洲郡。

(五)同縣坂田郡。

(一)坂田郡。米原の東北五キロメートル。居籍の清水は古來名高い。

(二)岐阜縣不破郡。一みこの國せき藤川のたえずしるつ代まで一(古今集、大歌所御歌)

(三)不破郡關ヶ原町松尾の大木戸坂にあつた關所。天武天皇の時始めて置かれた。關屋の板庇不破の人住まぬたあ秋の風(新古今集、藤原良經)

峯に立ちつゞきたる松の木の間に、けぢめ見えていと面白し。此所は夜深き霧のまよひにたどり出でつゞさめがゐるといふ水、夏ならばうち過ぎましやと思ふに、かちびとはなほ立寄りて汲むめり。

むすぶ手に濁る心をすゝぎなば
うき世の夢やさめが井の水
とぞ覺ゆる。

十八日、美濃國關の藤川渡る程に、先づ思ひつゞけける、

わが子ども君に仕へん爲ならで

わたらましやは關のふぢ川

(四)不破の關屋の板庇は今も變らざりけり。

ひま多き不破の關屋はこのほどの

しぐれも月もいかにもるらん

關よりかき暮しつる雨、時雨に過ぎてふり暮せば、道もいと悪し

心より外に

(一)同縣安八郡北杭瀬村。

うまや

つれなし

(二)愛知縣(三河國)寶飯郡。海抜三六二メートル。紅葉の勝地。

くて、心より外に笠縫のうまやといふ所に、暮果てねどとゞまる。

たび人はみのうち拂ふゆふ暮の

雨にやどかるかさぬひの里



(筆信豪野狩)尼佛阿

磐木どもも立ちまじりて、あをぢの錦を見る心地す。人に問へば宮路山といふ。

しぐれけり染むるちしほのはてはまた
もみぢの錦いろかへるまで

この山まではむかし見し心地するに、頃さへ變らねば、
待ちけりなむかしも越えし宮路山

おなじ時雨のめぐりあふ世を

山の裾野に竹のある所に、茅屋のひとつ見ゆる、いかにして、何の
たよりにかくて住むらんと見ゆ。

ぬしやたれ山の裾野に宿しめて

あたり寂しき竹のひとむら

日は入果てて、なほ物のあやめもわかぬ程に、わたうどとかやい
ふ所にとゞまりぬ。

五 銀の猫

上田 秋成

文治その年の秋八月十五日鎌倉の大將殿、鶴岡の宮居に詣で
させ給ふ例の事にて御供仕うまつる人々、御前追ひ、御後べ仕うま

(一) 度津。寶飯郡。
(二) 江戸時代の文學者。無腸翁、剪枝、崎人の號がある。大阪の人。文化七年(二四七〇)年没、年七十八。
(三) 第八十一代安徳天皇より次の後鳥羽天皇にわたる(一八四五年—一八四九年)。
(四) 右大將源賴朝。

忌垣

なほ人

ゆくりなきに



鶴岡 幡宮

つれる、渚に遊ぶ蘆鶴の歩みして、疾からず遅からず、列を亂さず練
出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、畏み奉る入敷多あるに、警衛し
て、あな。とだに言はせず、世にいかめしく尊き御有様なり。
かへりまをしして、御手輿に召
させ給ふ程、さとき御まなじりに
見留めさせ給ひ、御階の忌垣の許
八に畏まりをる法師のあるが、見上
げ奉る面つき、旅に飢ゑていと瘦
せ、黒みづきたるに、衣、杖、笠なども
乞食者の様したるが、目を偷みて
うづくまりをる、なほ人ならずや思しけん、あの法師が修行する様
名をも問へ」と仰せ給ふ。御輿添の若侍急ぎ走り寄りて、有難く御目
賜へり。いづこよりの修行ぞ。名をも申せ」と言ふ。ゆくりなきに驚き

(一) 周の西伯(文王)が渭水の陽で賢人太公望(呂尚)を得て歸つた故事

道行づと

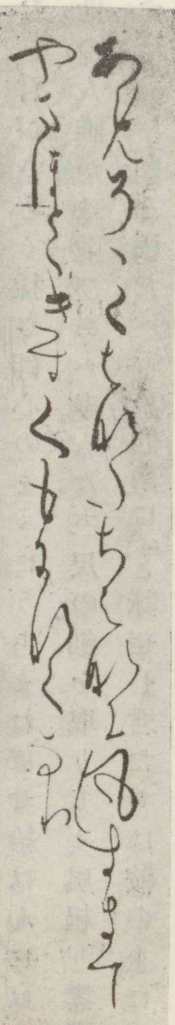
簀子

たる様して、雲水にありか定めず侍る者にて、名は圓位と申す。と言ふ。聞し召されて、さればこそ聞知りたれ。穴熊の猛き獲物のたぐひならで、賢き人得たるためしに誘ひ歸らん。我が後につきて來れと言へ。とて、召連れさせ給へり。
御館に入らせ、御装束改めさせ給へば、やがておほとなぶら數多照しか、げたり。今日の道行づとゐてこ。と仰せ給ふ。法師參れ。とて、御座近き簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔ははこやの山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ししみて、身は黒くやつしたれど、月花の歎の譽は、物の心なき東人さへ聞知りたるぞ。八百日行く濱の眞砂の中には、珠とて拾ひ收めたらんを、語りて聞かせよ。と仰せ給ふ。いみじく畏まりて、思ひかけず大木の御蔭に參り侍れば、いとまかやかしきにぞ、唯夢路をたどる様に侍りて、聞え奉るべき事も侍らず。さとき御眼に見現され侍るこそ、いとも有難

(一) 「伊勢の海千尋のはまに拾ふとも今は何てふかひかあるべき」(後撰集、敦忠朝臣)

あめそよくは
なたちはなに
風すきてやま
ほととぎすく
もになくなり

(嘶)



西傳法行師筆蹟

けれ。伊勢の海千尋の濱におり立ち習ひ侍れど、かひある事もうち出で侍らぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にも豫て學ばせ給ふとももり聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御うつは物の大いなるに思し寄せ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍り。大空に羽うちつけて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音いかで取りなめて聞ゆべき。あな畏しと申す。
うち笑ませ給ひ、弓取りし人のもと心の猛きには、詠む歌も直ぐあからさまにと聞くはまことか。歌は武士の荒々しき心には詠み得まじきものに、宮人たちはさたし給へりとや。軍に出立ちて、笛鼓の音、馬のいなゝきは物とも思はぬを、この三十文字餘りの學び

なよびか

①大風起り雲飛揚す。威海内歸加りて。故郷に歸する。安んぞ。猛士を得て。四方を守らん。②漢の高祖。一月。明らかに星稀に。烏鵲南に。飛ぶ。樹を繞る。こと。三匝。枝の依るべきなし。③魏の曹操。短歌行。

には心の後るゝはいかに。こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古への代々の帝は、馬に鞍おき御弓矢とらして、御軍に立たせ給ひし。その御歌を讀み見奉れば、猛く直々しく、調べもいと高しとこそ聞きわたり侍れ。いでや歌詠まんとては、ますらを心をとり隠し、あてになよびかにのみ詠出でまくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君がさとく猛き御心のまゝにうちまねばせ給はんには、今の世の人誰かは並びあへ奉らん。三尺の劍を取りて、大風起り雲飛揚す。』と歌ひ、槊を横たへて、烏鵲南に。』と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじきを磨りみがきたるも、染殿のやしほの色も、はかなき目移りばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、何れの道、何れの業にも、初より優れたらんは鬼にこそ侍らめ。』と言ふ。

「人々あれ聞き給へ。世は捨てのがれても、頼もしき人の心ならず

①藤原秀郷。

をこがまし

②周代の兵法家吳起が卒の疽をすつた故事。③齊の孫臏が魏に糧を炊ぐかまど兵糧を炊ぐかまど敵をして油断せしめたといふ故事。

や。汝が遠つ祖の秀郷と言ひしは、世にいみじき弓の上手となん聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそと思ひしぬる事は忘れずてぞあらん。事一つ事にてても教へ承らばや。こは益、恐ある御問はせなり。御物語のはては、つはものの道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山を棲所の瘦法師にだに問はせ給ふ事の忝さよ。向ひ奉りてはをこがまし、何をかは家の傳はりなどとして聞え奉るべき。まして有難き大宮仕を否み奉り、親たちの慈みをさへあだなるものに思ひなして、年僅かに二十三にして家を出でたるいたづらもの。弦ひかんすべだに心にも留めし事も侍らず。唯ひと言の忘れ難きは、賞を重くし罰を軽くせよと言ひしと、任ずる者を辱むれば危しと言ひし事とのみ病める士卒の疽をすひしは人の心をよく買ひなすと雖も、眞の情よりもおぼえ侍らず。かまどを滅して人を危きに陥るゝは將帥のさかしきにて、國を治め天の下を知るべ

事... 大... 小... 中... 大... 小... 中... 大... 小... 中...

まれびと

鹿... 猿... 鼠... 猫...

き君の御心にあらず。さはれ、軍を出し給へる事の怪しきまで賢く
おはするを餘所ながら見聞き侍るには、この方の御間免させ給へ。
とて、額を板敷に擦りつけて申す。
君笑みほこらせ給ひ、口とく、心さかしき法師なり。今宵は月見る
夜ぞ。物語今ははたしてん。人々と土器取りはやし、暁かけて遊ばん。



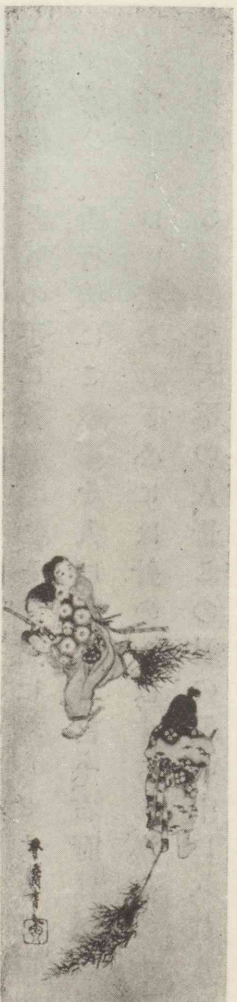
銀谷の猫 (筆香)

まれびとは酒飲まざるべし。鹿、猿の中に立交りて歌詠めと言ふと
も、詠むまじ。唯我が前にて遊べ。風ひや、かなるにも、飽かず飲み、物
きたなげに食散す人々は暖にもこそ。この火取りて法師に参らせ
よ。とて、白銀もて作りたる猫の形したるを取傳へて、君より賜はる。

はだく

鹿... 猿... 鼠... 猫...

みして手足あたゝめよ。とて、かのきら／＼しき物を與へて、顧もせ
で立去りぬ。
童うち驚き、これ見給へ。見も知らぬ法師の、見も知らぬ物賜ひつ
るは。とて青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶物を誰かは得
させん。拾ひやしつる。と言ふ。更に、路のそらにかゝる物やはあ



銀谷の猫 (筆香)

とて、前に置きたり。鹿、猿は尙心猛し。鼠をだにえ捕らぬ。瘦法師が爲
には、げに似つかはしき御賜ぞ。とて、三たび押戴きぬ。あした御暇賜
はりて立出づるに、御館の人やどりに誰人の童ならん、く、り袴の
裾朝露にぬれそぼちて、いと寒げにをるを見て、これ取らせん。火埋

似而非法師
あなづらはし

(一)世に謂ふ、林甫は口に蜜あり腹に劍ありと。唐書
(二)前漢の第一世劉邦、項羽と共に秦を滅し、後に天下を統一した。
(三)魏の武帝、三國時代の英雄。

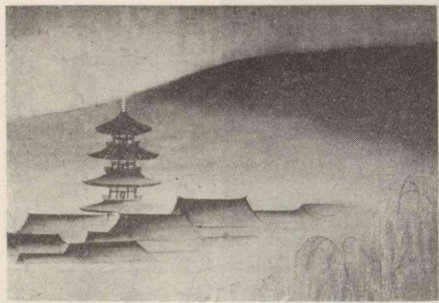
るべき。あな恐し。殿に奉りて給へ。と言ふ。やがて御館にもて参り、仕ふる君を呼出でて、しかく、の事なんと申す。いと怪し。大将殿の法師に賜ひしを、いかで童には得させけん、いぶかし。とて、先づ急ぎ聞え奉る。君うち笑み給ひ、かの似而非法師、あなづらはしく幼げなる物くれしとて、腹立たしくや思ひけん、我が門の前に棄てゆきつるよ。一度似而非者の手に穢れし物、その童に取らせよ。とて、取りおろさせ給ひぬ。西行後にこの事を人に語りて言ふ、右府は誠にねぢけたる君なり。口に蜜あれど、心には針のおはすらん。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふ事を生れ得給ひけん。唯悲しむべきは、神の御裔のこの後やうく衰へさせ給はん世の姿なるは。とて、涙とゞめ難くして物語りしとなん。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずとも、うちひそみぬべし。藤篋冊子

(一)鎌倉時代の歌人、文學者、京都の人。建保四年(一一八七)六十一歳で歿したと言はれる。

うたかた

棟を並べいらかを争ふ

伊藤藤龍涯筆



玉敷の都の敷(筆涯龍藤伊)

六

方丈記

その一

鴨

長明

一 うたかた

ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、且消え、且結びて、久しくとゞまらざる事なし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。玉敷の都のうち、棟を並べいらかを争へる、たかきいやしき人のすまひは、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年を作り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も變らず人も多かれど、古へ見し人は、三三十

無常を争ひ去る

(一) 第八十代高倉天皇の御代(一八三七年)



(筆涯龍藤伊) 火業の元安

人がうちに僅かに一人二人なり。あしたに死しゆふべに生るゝならひ、唯水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、いづ方より來りていづ方へか去る。また知らず、假のやどり誰が爲に心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。そのあるじと住家と無常を争ひ去る様、言はゞ朝顔の露に異ならず。あるは露落ちて花残り、残ると雖も朝日に枯れぬ。あるは花は凋みて露尙消えず。消えずと雖も夕を待つ事なし。凡そ物の心を知れりしよりこの方、四十餘りの春秋を送れる間に、世の不思議を見る事、稍たびくになりぬ。

二 安元の大火
去にし安元三年四月二十八日かとよ、風

(巽乾)

ち本はる



(筆涯龍藤伊) 火業の元安

烈しく吹きて、靜かならざりし夜、戌の時ばかり都のたつみより火出で來て、いぬゐに至る。果には朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省まで移りて、一夜が程に塵灰となりにき。火元は樋口富の小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けるとなん。吹迷ふ風にとかく移り行く程に、扇を廣げたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焰を地に吹きつけたり。空には灰を吹立てたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹切られたる焰飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ、移り行く。その中の人、現心あらんやあるは煙に咽びて倒れ伏し、あるは焰にまぐれて忽ち死にぬ。あるはまた纒かに身一つからくして遁れたれども、資財を取出づる

さながら灰燼と
なる

に及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となりにき。そのつひえいくそばくぞ。このたび公卿の家十六焼けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛のたぐひ邊際を知らず。人の營皆おろかなるうちに、さしも危き京中の家を作るとして、寶を費し心を惱ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

三 治承の辻風

また治承四年卯月二十九日の頃、中の御門、京極の程より大きな辻風起りて、六條わたりまで、いかめしく吹きける事侍りき。三四町をかけて吹きまくる間に、そのうちに籠れる家ども、大きなも小さきも、一つとして破れざるはなし。さながらひらに倒れたるもあり。けた、柱ばかり残れるもあり。また門の上を吹放ちて四五町が程に置き、また垣を吹拂ひて隣と一つになせり。況や家の内の寶數

(一)高倉天皇の御代。
(二)八四〇年。

(三)

業風

を盡して空にあがり、檜皮、葺板のたぐひ、冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如く吹立てたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴りとよむ音にも、の言ふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞおぼえける。

四 都うつり

また同じ年の六月の頃、俄に都うつり侍りき。いと思の外なりし事なり。おほかたこの京のはじめを聞けば、嗟峨天皇の御時都と定まりにけるより後、既に數百歳を経たり。ことなる故なくて、たやすく改るべくもあらねば、これを世の人たやすからず憂へあへる様、ことわりにも過ぎたり。されど、とかく言ふかひなくて、御門よりはじめ奉りて、大臣、公卿悉く移り給ひぬ。世に仕ふる程の人、誰かひとり故郷に残り居らん。官位に思をかけ、主君の蔭を頼む程の人は、ひと日なりとも疾く移らんとはげみあへり。時を失ひ、世にあまされ

(一)平清盛が第八十
一代安徳天皇を
奉じて都を福原
(今の神戸市の
西部)に遷した
こと。世に福原
遷都と言ふ。
(二)第五十二代。
(三)安徳天皇。

莊園

て期する所なき者は、愁へながら留りたり。軒を争ひし人のすまひ、日を経つ、荒行く。家はこぼたれて淀川に浮び、地は目の前に畑となる。人の心皆改りて、唯馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の莊園をば好まず。

木の丸殿

その時おのづから事の便りありて、津の國今の京に至れり。所の有様を見るに、その地程せばくて、條里を割るに足らず。北は山に沿ひて高く、南は海に近くて下れり。浪の音常にかまびすしくて、潮風殊に烈しく、内裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやとなかなかやうかはりて、優なる方も侍りき。日々に壊ちて、川もせきあへず運び下す家は、いづくに作れるにかあらん、尙空しき地は多く、作れる屋は少し。故郷は既に荒れて、新都は未だ成らず。ありとしある人、皆浮雲の思をなせり。もとよりこの所にゐたる者は、地を失ひて憂

ありとしある人
浮雲の思

布衣

都の手ぶり
瑞相
しるし

へ、今移り住む人は、土木のわづらひある事を歎く。路のほとりを見れば、車に乗るべきは馬に乗り、衣冠布衣なるべきは直垂を著たり。都の手ぶり忽ちに改りて、唯ひなびたる武士に異ならず。これは世の亂る、瑞相とか聞きおけるもしるく、日を経つ、世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の憂遂に空しからざりければ、同じ年の冬、尙この京に歸り給ひにき。されど壊ちわたせりし家どもは、いかになりにけるにか、悉くもとの様にも作らず。

ほのかに傳へ聞くに、古への賢き御代には、憐みをもて國を治め給ふ。即ち御殿に茅を葺きて、軒をだにと、のへず、煙の乏しきを見給ふ時は、限りある貢物をさへ免されき。これは民を恵み、世をたすけ給ふによりてなり。今の世の中の有様、昔になぞらへて知りぬべし。

(一) 堯帝。
(二) 第十六代仁徳天皇。

五 養和の飢饉

(一)安徳天皇の御代
二八四一—
八四二年

ぞめき

なべてならぬ法

さのみやはみさ
をもつくりあへ

あまさへ

また養和の頃かよ、久しくなりてたしかにおぼえず、二年が間
飢渴して、あさましき事侍りき。あるは春夏ひでり、あるは秋冬大風
大水など、よからぬ事どもうち續きて、五穀悉く實のらず、空しく春
耕し夏植うる營のみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。
これによりて國々の民、あるは地を捨てて境を出で、あるは家を
忘れて山に住む様々の御祈始りて、なべてならぬ法ども行はるれ
ども、更にそのしるしなし。京のならひ、何わざにつけても、源は田舎
をこそ頼めるに、絶えてのぼる者なければ、さのみやはみさをもつ
くりあへん、念じわびつゝ、様々の寶物かたはしより捨つるが如く
すれども、更に目見たつる人もなし。たま／＼かふる者は、金を軽く
し、粟を重くす。乞食路のべに多く、憂へ悲しむ聲耳に滿てり。
さきの年かくの如く、からくして暮れぬ。あくる年は立直るべき
かと思ふに、あまさへ疫病うちそひて、まさる様に跡形なし。

七 方丈記 その二

六 わづらひ

すべて世のありにくき事、我が身と住家とのほかなくあだなる
様かくの如し。況や所により身の程に隨ひて心を悩ます事、擧げて
數ふべからず。

若しおのづから身數ならずして權門の傍にをる者は、深く悦ぶ
事はあれども、大いに楽しむに能はず。歎ある時も、聲を揚げて泣く
事なし。進退安からず、立居につけて恐れ戦く。例へば、雀の鷹の巢に
近附けるが如し。若し貧しくして富める家の隣にをる者は、朝夕す
ぼき姿を恥ぢて、諛ひつゝ、出で入る。妻子僮僕の羨める様を見るに
も、富める家の人のないがしろなる氣色を聞くにも、心念々に動き
て、時として安からず。若しせばき地にをれば、近く炎上する時その

すぼし

心念々に動く

たまゆらも

(一)「住みわびて我
さへ軒の忍草し
のぶかたぐし
げき宿かな一金
葉集、周防内侍

たづき

害を通る、事なし。若し邊地にあれば、往反煩多く、盜賊の難はなれ
難し。勢ある者は貪慾深く、ひとり身なる者は人に輕しめらる。寶あ
ればおそれ多く、貧しければなげき切なり。人を頼めば身他の奴と
なり、人をはごくめれば心恩愛につかはる。世に従へば身苦し。また従
はねば狂へるに似たり。何れの所を占め、いかなるわざをしてか、し
ばしもこの身を宿し、たまゆらも心を慰むべき。
我が身父方の祖母の家を傳へて、久しくかの所に住む。その後縁
かけ身衰へて、忍ぶ方々しげかりしかば、終に跡とむる事を得ずし
て、三十餘りにして、更に我が心と一つの庵を結ぶ。これをありしす
まひにならずらふるに、十分が一なり。唯居屋ばかりを構へて、はかば
かしくは屋を作るに及ばず。僅かに築地をつけりと雖も、門たつる
にたづきなし。竹を柱として車宿りとせり。雪降り風吹く毎に危か
らずしもあらず。所は河原近ければ水の難深く、白波のおそれも騒

よすが
(一)一名小鹽山。
都府山城國乙京
訓郡にある。京
都市の西南

(二)「猶行人の旅宿
を造り、老蠶の
獨り繭をなすが
ごとし。その住
む幾時ぞ。(慶滋
保胤池亭記)

がし。

すべてあらぬ世を念じ過しつゝ、心を惱ませる事は、三十餘年な
り。その間をりくゝのたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。す
なはち五十の春を迎へて家を出で、世を背けり。もよとり妻子なけ
れば捨難きよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとま
めん。空しく大原山の雲にいくそばくの春秋をか經ぬる。

七 閑居

此所に六十の露消え方に及びて、更に末葉の宿りを結べる事あ
り。いはゞ旅人の一夜の宿りを造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。
これを中頃の住家にならずらふれば、また百分が一にだも及ばず。と
かくいふ程に齡は年々に傾き、住家はをりくゝにせばし。その家の
有様世の常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。所を
思ひ定めざるが故に、地を占めて作らず。土居を組み、打覆を葺きて、

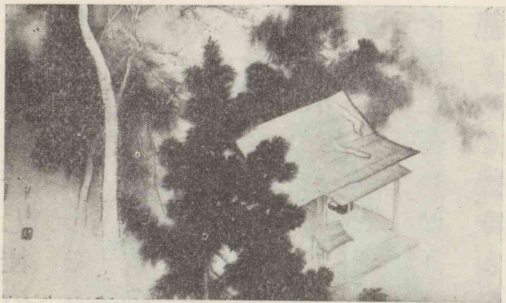
(一)京都市伏見區木幡山の東北

(二)六卷。源信僧都の著。源信は天台宗の僧。寛仁二年(一六一八)寂。年七十六。ほどろつかのみ

繼目毎にかけがねを掛けたり。若し心に適はぬ事あらば、易く外に移さんが爲なり。その改め作る時いくばくの煩がある。積む所僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらず。
今日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を作り、内には西の垣に沿へて、阿彌陀の畫像を安置しまつり、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並びに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黒き革籠三四合を置く。即ち和歌、管絃、往生要集如きの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶各一張を立つ。いはゆる折箏、繼琵琶これなり。東に沿へてわらびのほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、此所に文机を出せり。枕の方に炭櫃あり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占め、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ちもろくの藥草を植ゑたり。假の庵の有様

かくの如し。

その所の様を言はゞ、南にかけひあり、岩を疊みて水を溜めたり。



幽 棲 (伊藤龍涯筆)

林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり、觀念の便りなきにし。もあらず。春は藤浪を見る、紫雲の如くにして。西の方に匂ふ。夏は杜鵑を聞く、語らふ毎に死出の山路を契る。秋はひぐらしの聲耳に満てり。空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む、積り消ゆる様罪障に喩へつべし。若し念佛も、のうく、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとりをれば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとし

つま木
觀念の便り

(一) 京都府(山城國)紀伊郡 宇治川の東岸
 (二) 沙彌滿誓、第四十四代元正天皇の御代頃の人
 (三) 澤陽江頭夜客を送る。楓葉荻花秋愁惹たり
 (四) 百樂天琵琶行(桂大納言源經信琵琶の名手。嘉保元年(一七五四年)太宰権帥に貶せられた。名曲とも琵琶の名曲)
 (五) とも琵琶の名曲

あからさま

もなければ、境界なければ何につけてか破らん。若し跡の白波に身を寄するあしたには岡の屋に行交ふ船を眺めて、満沙彌が風情をぬすみ、若し桂の風葉を鳴す夕には、潯陽の江を想ひやりて、源都督のながれをならふ。若し餘りの興あれば、しばし松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を喜ばしめんとにもあらず、ひとり調べ、ひとり詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

おほかたこの所に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今既に五とせを経たり。假の庵も稍ふる屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。おのづから事の便りに都の様を聞けば、この山に籠りゐて後、やんごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、盡してこれを知るべからず。たびの炎上に亡びたる家またいくそばくぞ。唯假の庵のみ、のどけくしておそ

がうな (鶯)



鴨 長 明

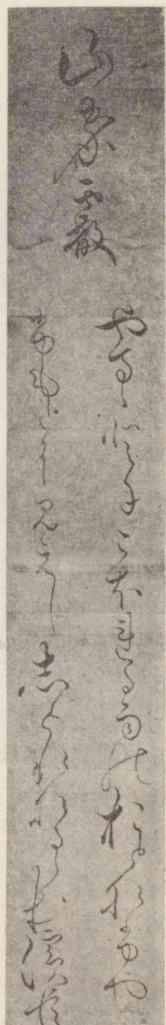
れなし。
 程せばしと雖も夜臥す床あり、晝ある座あり、一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯にをる。即ち人を恐るゝが故なり。我またかくの如し。身を知り世を知れ、ば、願はず、まじらはず、唯靜かなるを望とし、愁なきを樂しむとす。

それ三界は唯心一つなり。心若し安からずば、牛馬七珍も由なく、宮殿樓閣も望なし。今寂しきすまひ一間の庵、自らこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食となれる事を恥づと雖も、歸りて此所にをる時は、他の俗塵に著する事をあはれぶ。

若し人この言へる事を疑はゞ、魚鳥の有様を見よ。魚は水に飽か

山家巖
やまゝとにこ
ほれる雨のお
とにふやふも
くに見えらし
なるらむし
濱 臣

(一) 江戸時代の國學
者名は養芳、閑
田子と號した。
近江の人。文化
三年(二四六六
年)歿、年七十四
(襄)



蹟筆臣濱水清

をさそふにやあらん。きぬたの音の雁がねに通ふにやあらん。あな
怪し。あな怪し。そもこの音の悲しきか。住む里の寂しきか。打つをり
の憂き故か。皆あらず。聞く人の心の寂しきなり。——泊酒舍文集——

四 冬のころ

伴 蒿 蹊

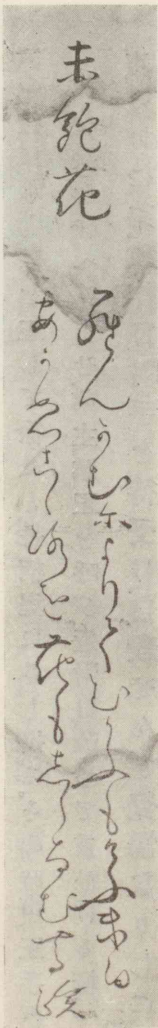
花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がくれ、木の芽春雨も時雨
にかはり、それも何時しか染めぬべき物なくなりぬれば、みぞれに
移りて雪と積る。ひと、せの月日は隙行く駒の程もなきかな。振分
髪うなる子が大人しくなりぬと言はれしなん、やがて老のはじ
めにて、つひにひげ髪白くなりぬるをしもつくづくと思ひ比べ
て、埋火のもとにのみうづくまるを、若き人々はさこそ見苦しと思

(一) 漢の武帝、秋風
辭。

(二) 「前車の覆るは
後車の誠」史記、
賈誼傳

未飽花
らんかむによ
りてむかふも
けふ幾日あか
ぬころを花
もしらなむ
蒿 蹊

(三) 「少くして大志
客に謂つて曰く、
丈夫の志たるは、
窮しては當に益、
堅かるべく、老
いては當に益、
壯なるべし。」
(後漢書、馬援傳)



蹟筆蹊蒿伴

ふらめ。我もまたしかぞありし。少壯いくばく時ぞ、老をいかん。とか
らうたにも聞ゆるを、徒に朽果てぬる事の、今更に悔ゆるもかひぞ
なき。前(二)の車の覆るを後の車の誠てふ事もあり。我にならひ給ひ
そよ。冬は歳の餘りとも言ふを、この頃の雪を集め、長き夜を空しく
ないね給ひそと言はまほし。老いては益、壯んなるべしと勇みし人
は、己がたぐひにはあらず。唯寒きにたへねば、ひたやごもりに籠る
程に、ねぶりは宵よりきざして、しかも夜深くは目覺めぬ。冬も憂し。
老も憂し。こは老の心をうつすとや言はん、冬の心をうつすとや言
はん。

—— 閑田文章 ——

(一) 英文學者、劇作家、文學博士、名は雄藏、岐阜縣の人。安政六年(二五)生。
 (二) 大阪市東淀川區を流れる長柄川(今の新淀川)の堤。
 (三) 豊臣氏の功臣。元和元年(二二)七五年)大阪落城の時自殺した。年六十二。
 (四) 大阪府(攝津國)三島郡茨木町。

(五) 石川伊豆守貞政。

(剩)

九 長柄堤の訣別 坪内逍遙^(一)

晨雞再び鳴いて残月薄く、征馬連りにいなゝいて行人出づ。はや分れ行く横雲や、残んの星を一つづつ、鐘が消し行くいなめの、長柄堤に秋たけて、一叢蘆に風黒く、有明凄き大川水逝きて歸らぬ浪の音、狭霧に咽び白け行く、千草が蔭の蟲の聲、哀れはいと優るらん。片桐市、正且元は、居城茨木へ立退かんと、從ふ郎等一百餘人、丑の刻に邸を立つて、大阪城を後になし、列を正して徐々と、長柄堤にさし掛る。その時市、正手綱を控へ、從兵を先へ進ませ、弟主膳正を呼び近附け、改めて言ひける様、

市、いかに弟、我昨日討手を待受け、自殺せんず覺悟なりしに、伊豆守が残兵ぬけがけなし、討手の荒膽をひしぎし爲、備ありと見たがへしか、また寄せ來らん模様もなく、あまつさへ夜に入りては、外にありし家臣^(二)まで、變を聞きつけ馳集り、血氣のともがらこれに氣を得て、薪に油をそゝげる如く、弓、鐵砲とひしめき騒ぎ、命^(三)をきかばこ

(一) 織田信雄常眞。
 (二) 豊臣秀頼。

危機

(三) 木村長門守重成

吉左右

差配す

そ。うちすて置かば、珍事に及ばんも圖り難く、暫く彼等をなだめん爲、ひとまづ茨木へ引退き、後事を圖らんとは言ひしもの、昨夜ほのかに傳へ聞けば、織田入道も君を見限り、俄に京表へ退きし由、お



片桐且元

家の危機愈、迫んぬ。今にも關東と隙を生じ、大事に到らん事必定なり。それにつき所存あつて、先刻今村三右衛門を木村が邸へ走らせたり。おつけ三右が吉左右あらん。我はこれにて相待つべし。御身は暫く我に代り手勢を差配し、途中に不慮の間違

なき様、一足先へ參らるべし。

と言葉のうち、遙かにしたひ駈來る足音。

主、あの足音は確かに今村。市、三右衛門か。今、我が君これに御座

ありしか。長門様にはおつつけこれへ。市は、大儀々々満足なるぞよ。然らば主膳は一足先へ。三右衛門も此所かまはず、我はこれにて相待つべし。主仰では御座りますれど、油断ならざる當節がら、いかなる變事あらんも知れず。今唯御一人この所に御座あらんは心許なし。主せめて我々、二人、兩人は。市はて入らぬ遠慮、氣づかひ致すな。往け。主ぢやと申して。市はて往けと申すに。二人は、あ。

顔見合せて是非なくも、主膳を先に三右衛門、心残して行過ぐる。

後には何か一思案、寂然として駒たつる、長柄堤の有明方、ねぐらにさへづる小鳥の聲、川霧やうく晴行けば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見えわたる賤が屋に、一筋昇る朝煙、くだかけの聲勇ましく、生氣溢る、ひんがしの空には似ぬや入る方の、月凄まじき柳蔭、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し遠方におぼろくとあらはる、名に大阪の四衢八街、悄然として寂しげに、一棟高く聳えしは、

くだかけ

悄然

(一) 豊臣秀吉

(二) 加藤肥後守清正

(三) 秀吉の妻

唇齒亡ぶ

市お、あれこそは御天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと、築かせられし大阪城故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ。取分け加藤肥州逝去の後、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者は才略乏しく、阿附黨同して相せめげば、大政所の御方さへ、當家を餘所に見そなはし、浮世離れし御有様、唇齒既に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池もそのかひなく、

言ひかけて聲曇らせ、

市、須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か情なや。この且元がする事なす事、いすかの嘴とくひ違ひ、兩家を繋ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の道火となり、毘廬舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか、お家とこしなへに康かれと、祝ひし文字が原となり、降つて沸いたる難題は、唯前門の虎にして、後に不慮

(四) 徳川秀忠の長女、慶長八年(二二六三年)秀頼に嫁いだ。
(五) 京都方廣寺の大佛殿の鐘の銘に「國家安康」の文字があつたので、家康は自分を呪咀するものであるとして言ひがかりをつけた。

(良)

の豺狼あり。かゝる仕儀となつたる事、御運の末と言ひながら、
こらへず馬より飛びくだり、彼方に向ひ平伏なし、
市、これ、しかしながら不肖且元、愚昧にして先見なく、姑息因循して
大事を誤り、空しく關東のわなに罹り、仰せ附けられし御遺命に、背
き奉る今日の仕合せ。不忠とも、言ひがひなしとも思し召さん。それ
を思へば且元が、この腸はちぎるゝばかり。つぐのひ難き不臣の罪
は、あの世でおわび仕らん。お宥しなされて下さりませ。

在すが如く兩手を突き、人目なければ稍しばし、不覺の涙に暮れけるが、
稍あつて心付き、

市、あゝ、我ながら不覺の至、我が大罪の御わびよりも、さしかゝる
御家の安危、長門守にはいかにせし、心許なき事どもぢやなあ。

すかし眺むるをりこそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音、程もあらせす唯一騎、
殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る、木村長門守重成。

市、市、正殿に候な。市、長門殿待ちかねしぞ。

(殿々)

言ふ間に駈寄るくつわづら、右手におり立ち顔見合せ、言葉はなくてそ
ぞろにも、先づ袖ぬるゝ朝露や、風そうくたる枯柳の枝、入方の月ゆら
めきて、老行く秋の寂しさを、長柄堤に留むらん。

社稷

(一) 秀頼の母淀君。

市、もはや豊臣の御社稷も、愈末となつたるか、棟梁と頼む足下ま
で、佞人、讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは、
某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮の
その間に、思ひ懸けぬ珍變あり、續いて足下に御討手と、昨朝承り大
いに驚き、すぐに御表へ参入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道
殿日頃に似氣なく、激論の末席を蹴立て、只今退座ありしとばかり、
後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る、大野、渡邊等が我意暴
慢、この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らん
と二たびまで、刀の柄に手は掛けしが、貴殿の日頃の教訓を、思ひ出
して無念を忍び、無實と知つて忠臣を、救ひ得ざりし言ひがひなさ。

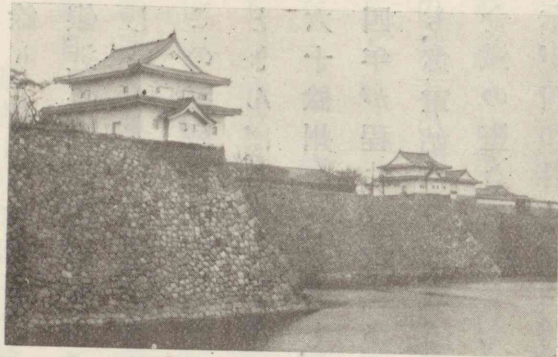
(二) 名は治長。
(三) 名は糺。

鼠輩

(一) 和歌山縣伊都郡高野山の北谷にある村
(二) 名は昌幸。大阪落城の際戦死した。年四十六

悔むを且元おし宥め、市いしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢申せし如く、御家の大仇は彼等にあらざ。鼠輩の爲に命を落すは、大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこの度の一條遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至大切なるは御家の後事。某退去の事關東に聞えなば、破綻生ぜん事治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿の、既に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉くもれ、年來の苦心皆うたかた、大亂破裂せんは目前なり。この上は唯ひとへに、籠城の計畫こそ肝要なれ。木して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。市されば今御城に兵糧金銀は乏しからず、まつた猛卒、勇士も事缺かねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置きたり。木してその智謀の將とは、市今九度山に隠れ忍ぶ、信州上田前の城主、眞田安房守が二男、佐衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思

(一) 元佐の領主。大阪落城の際捕へられて後斬られた。



大阪城

ふ、智勇兼備の良軍師。關ヶ原の一戦以來、關東の跋扈を怒り、螫して世の様を窺ひをるを、先年御身方となし置いたり。事起らば上使を以て、急ぎ彼を招かるべし。合戦の進退は、一切かの人に任せられよ。その他關ヶ原の一亂以後、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次、何れも得易からぬ良將なるが、豫てちなみはつけ置きたり。上御使を以て招かせられなば、心を傾け馳参ぜん。これ第一の手配なり。木してまた籠城となつたる曉、敵を防がん手配は、市その儀も豫て地利を考へ、出丸なくてはかなふまじと、前年紀州の山々より、材木數多伐出させ、商業の爲と偽り、紀州川の川上より、浪速津に押流させ、

(一) 徳川家康

御船入に積置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる、數萬俵の糧米あり。籠城數年にわたるといふとも、尙支ふるに餘りあるべし。木、それに加へて故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費かさむと雖も、尙若干の餘財あり。市、甲冑、兵具も乏しからず。木、城は名に負ふ南山不落。市、眞田、後藤の智勇をもて、この堅城に立籠り、忠臣悉く心を一にし、ひとへに君家を守護するときんば、木、たとひ關東の奸老雄、利をくらはせ諸大名をなつけ、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻寄すとも、市、なか／＼三年四年が程には、攻落さん事難かるべし。木、まつた若年には候へども、愈軍始りなば、我また一方を承り、速水、御宿、和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の吹籟さん白旗は、祖先佐佐木が四つ目結、君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石もまた透りぬべし。利欲に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。こ

(二) 名は守久
(三) 名は正倫
(四) 名は宗是

(一) 家康

の上は仰に従ひ、この事君に言上なし、直ちに軍の手配せん。御心安かれ市、正殿。市、ほ、頼もし、唯大切なるは上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とは言ひながら往時に照し、成行く末を鑑れば、木、淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野、渡邊。市、上、御發明にわたらせらるれど、木、讒佞これを蔽ふが故、市、地の利はあれども人の和なく、木、故太閤が御威武に、戦き震ひうち伏し、六十餘州の民草も、市、天の時にや大御所の、おのづからなる徳風に、何時しか靡く世の有様。木、いかなればかくまでに、御運傾く西天の、市、有明の影薄れつ、木、東天紅と八面に、かしましく鳴くくだけかけは、市、新日東天に昇るといふ、木、世の成行の、二人、影なるか。

是非もなき世の有様と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの／＼と明けにけり。

—— 桐一葉 ——

(一) 哲學者、評論家、
京都帝國大學教
授、兵庫縣の人、
明治二十二年生

一〇 漁夫

和辻哲一郎

人生は戦である。そして戦の大小深淺が人間の價値を左右する。私は或冬の日、紺青鮮かな海の邊に立つた。帆を張つた二三十艘の小舟が、群をなして沖から歸つて來る。そして鳩が地へ舞ひおりの様に、徐々に一艘づつ帆をおろして、半町程の沖合に屯した。岸との間には大きな白い磯波が卷返してゐる。何時の間にか老人や、女や、子供たちが、岸邊に群がり立つた。やがて體格の立派な若者等の乗つた舟が、岸へ突進んで來る。磯波は烈しく押戻す。磯から綱が投げられる。若者が波の間に飛びこんで行く。舟は木の葉の様にもまれてゐる。綱が舟に結び附けられる。若者は舷に肩を當てる。陸からは綱を引く者が、諸聲に力のリズムを響かせる。かくて波を蹴散し、足をそろへ、聲を合せて、舟を砂の上へ引きずり上げて行く。

有機體

集中と純一

一艘上ると共に、舟にゐた若者たちは、直ちに綱を取つて海へ向つた。次の一艘が磯波に乗掛ると、丁度荒廻る鹿の角に投掛ける様に、若者は舟に綱を投掛ける。そして他の若者たちは躍り掛つて、舷に肩を當てて、一氣に舟を引上げる。かうして次から次へと、數十艘の舟が陸に上げられるのである。陸上の人數は益殖える。舟は益、面白さうに上つて來る。老人や、女や、子供たちは、綱につかまつて、快活に跳ねてゐる。誰が命令するといふのでもないのに、一團の人々は有機體の様に、協力と分業とで、完全に仕事を成遂げて行く。

私は息を詰めてこの光景を見守つた。海のと戦ふ人間の姿。集中と純一とが最も、具體的な形に現れてゐる力の充實、隙間のない活動。一人の少年が兩手を高く舉げて、波の中に躍りこんで行く。首だけ出して、波にさらはれた板切に追ひすが、やがて板切を抱いて、水を跳飛しながら駈上つて來る。生命が躍り跳ねてゐる。生命が

法悦

自然と戦ひ、それを征服してゐる。私は其所に現れた集中と、純一と、全存在的な活動とを見て、暫し恍惚とした。この氣持のよさは、我々がすべての活動に追求してゐる所の一種の法悦であつた。私たちの内にもまた生命の焰はかく燃上らなくてはいけない。誠にそれは生命本來の姿であり、また生命本來の歡喜である。

立場を是認する

かうして漁夫の群の活動を眺めてゐるうちに、私はふと傍觀者の手持ぶさたを感じ出した。私は漁夫の群に投じて共に働くが、それでなければ、傍觀者としての自己の立場を是認するか、何れかに道をきめなければならなくなつた。そして私の頭には、百姓と共に枯草を刈るトルストイの面影と、地獄の扉を見おろして坐してゐる^(一)考へる男の姿とが、相並んで浮び出た。私は石の上に腰をおろして、右の肱を左の膝に突いて、顎を手の甲に載せて、そして考に沈ん

(一) フランスの彫刻家ロダンの傑作

だ。残つた舟はもう二三艘になつてゐた。

私は思つた、漁夫の群に貴い集中と純一とを認めたのは、私の心に過ぎなかつたのではあるまいか。彼等はやがて濱から家に歸る。



「男へ考」作ンダロ

其所にはもう貴さはない。彼等は波と戦つて勇ましくうち克つた。しかし、敵手が人間になり、更に自分の心になると、彼等はもう立派な戦士ではない。彼等の活動は眞生の面影を暗示す

る。しかし、それは彼等自身の全生活ではなかつた。彼等は低い力と戦つてゐる時にのみ強いのであつた。

私は複雑な深さの知れぬ人生の色々な力を思つた。そして集中と純一との缺けてゐるみじめな醜さを心に浮べた。其所にある苦

終局

屈託

視點

しい戦は、裸になつて冬の海に飛びこむ事では解決されさうにもなかつた。私は唯自分の力で、自分の内生にあの集中と純一とを獲得する外はない。その爲には、私はあらゆる方面に終局まで戦はなくてはならぬ。勝利を得るまでの分裂した生活のみじめさは、目下自分の力では如何ともし難い。

私は一つの事を悟り得た。迷と屈託とに遲滞してゐるの故を以て、直ちにその人の人格を卑しめてはいけない。單に態度の純一なのを以て、直ちにその人の人格を過大視してはいけない。態度の美しさの外に、尙一つの戦の深さによつて人を見る視點があるからである。

一一 待賢門の戦 その一

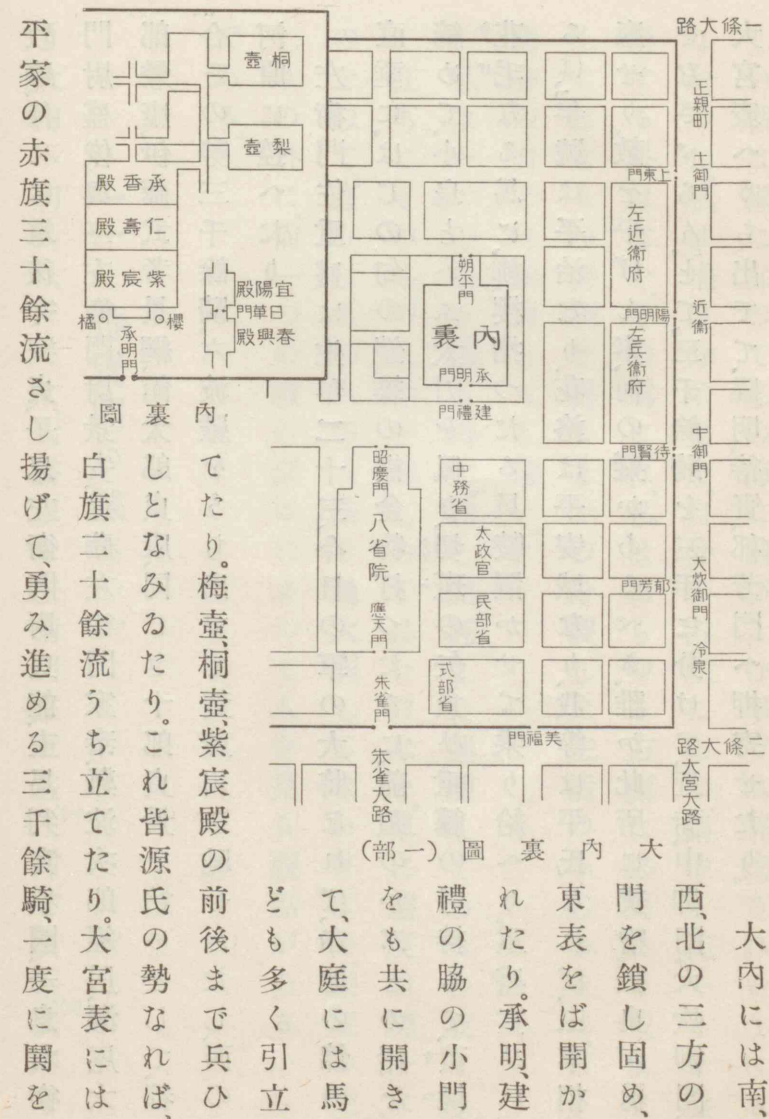
大内へ向ふ人々には、大將軍は左衛門佐重盛、三河守頼盛、淡路守

(一)平忠盛の第五子、清盛の弟。
(二)清盛の弟。

教盛、侍には筑後守家貞、子息左衛門尉貞能、主馬判官盛國、子息右衛門尉盛俊、與三左衛門尉景安、進藤左衛門家泰、難波次郎經房、瀬尾太郎兼康、伊藤武者景綱、館太郎貞康、同じき十郎貞景を始めとして、都合その勢三千餘騎、六波羅をうち出でて賀茂川を馳せわたし、西の河原に控へたり。

(楯、黄楯)

左衛門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂には、じの匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭のかぶとの緒を締め、小鳥といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黄桃花毛なる馬に、柳、櫻摺つたる貝鞍置かせて乗り給へり。重盛宣ひけるは、年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げん事、何の疑かあるべき。誰か此所に樊噲、張良が勇をなさざらん。とて、三千餘騎を三手に分けて、近衛、中御門、大炊御門、大宮表へうち出でて、陽明待賢、郁芳門へ押寄せたり。



どつと作りければ、大内も響きわたりて夥し。鬨の聲に驚きて、只今までゆゝしく見えられつる信賴卿、顔色變りて草葉の如くにて南階を下られけるが、膝ふるひておりかねたり。人なみ／＼に馬に乗らんと引寄せさせたれども、太りせめたる大の男の、大鎧は著たり、馬は大きなり、乗りわづらふ上、主の心には似も似ず、逸りきつたる逸物なれば、つと出でん、つと出でんとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒も、かくやとおぼゆるばかりにて、乗りかね給ふ所を、侍二人つと寄つて、疾く召し候へ」とて押上げたり。餘りにや押したりけん、弓手の方へ乗越して、伏し様にどうと落つ。急ぎ引起して見れば、顔に砂ひしと付き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日頃は大将とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、あの信賴といふ不覺人は臆したりな」とて、日華門をうち出でて、郁芳門へ向

(一) 周の穆王が八匹の駿馬を驅つて天下を周遊したる事が史記に見え

不覺人

見るは僻目か

苗裔

(棕)

(一)源義平・義朝の長子

はれければ、信賴も鼻血押拭ひ、とかくして馬にかき乗せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用にあふべしとも見えざりけり。

左衛門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に残し置き、五百餘騎にて押寄せて、呼ばはり給ひけるは、この門の大將軍は信賴卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔太宰大貳清盛が嫡子、左衛門佐重盛、生年二十三と名のり懸ければ、信賴返事にも及ばず、それ防げ侍どもとて引退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし、我先にと逃げければ、重盛愈、勇みて、大庭のむくの木の下まで攻めついたり。義朝これを見て、惡源太はなきか。信賴といふ大臆病人が、待賢門をばや破られつるぞや。かの敵追出せと宣ひければ、承り候とて駈けられたり。續く兵には鎌田兵衛、後藤兵衛、佐佐本源三、波多野次郎、三浦荒次郎、須藤刑部、長井齋藤別當、岡部六彌太、猪俣小平六、熊谷次郎、平山武者所、金子十郎、足立右馬允、上總介八郎、關次郎、片桐小八郎大

夫以上十七騎、くつばみを並べて馳向ふ。大音聲を揚げて、この手の



(筆城鷲藤伊)ふ追を盛重平義

大將は誰人ぞ。名のれ聞かん。かく申すは清和天皇九代の後胤左馬頭義朝が嫡子、鎌倉惡源太義平と申す者なり。生年十五歳武藏の大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしよりこの方、たびの合戦に一度も不覺の名をとらず。年積つて十九歳。見參せん。とて、五百餘騎の真中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、豎ざま横ざま十文字に敵をさつと蹴散して、端武者どもに目な懸ける。大將軍を組んで討て。はじめの鎧に蝶の裾金物打つて、黃桃花毛の馬に乗つたるこそ重盛よ。押

(一)今埼玉縣比企郡菅谷村の大字

端武者

並べて組んで落ち、手捕にせよ。」と下知すれば、大將を組ませじと防
ぐ平家の侍共、與三左衛門進藤左衛門を始めとして百騎許が、中
ぞ隔りける。惡源太を始めとして十七騎の兵共、大將軍に目を懸け
て、大庭のむくの木を中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追
廻して、組まんく、とぞ揉うだりける。十七騎に駈立てられて、五百
餘騎かなはじとや思ひけん、大宮表へさつと引く。

一一 待賢門の戰その二

大將左衛門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふ所に、筑後守つ
と参りて、曩祖平將軍の二たび生れ變り給へる君かな。」と向ふ様に
譽め奉れば、今一度駈けて家貞に見せんとや思はれけん、前の五百
餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、また大庭のむくの木
まで攻寄せたり。また惡源太駈向ひ、見廻して言ひけるは、只今向ひ

(一)平貞盛。

たるは皆新手の兵なり。但し大將はもとの大將重盛ぞ。以前こそ漏
すとも、今度に於ては餘すまじ。押並べて組んで捕れ、兵共。」と下知す
れば、勇みに勇みたる十七騎、我先にと進みければ、今度は難波次郎、
同じき三郎瀬尾太郎、伊藤武者を始めとして、百餘騎が中に隔てた
るに事ともせず、惡源太弓をば小脇にかい挟み、鎧踏張り突立ち上
り、左右の手を擧げ、幸に義平源氏の嫡々なり。御邊も平氏の嫡々な
り。敵には誰か嫌はん。寄れや、組まん。」と言ふまゝに、先の如く大庭の
むくの木の下を追廻して、五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組み
ぬべうもなくや思はれけん、また大宮表へ引いて出づ。惡源太二度
まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これ
を見て、須藤瀧口を以て、汝が不覺に防げばこそ敵たびく、駈入る
らめ。あれ速に追出せ。」と言遣されければ、俊綱馳せてこの由を言ふ
に、承り候。進めや者共。」とて、色も變らぬ十七騎、大宮表に駈出でて、敵

面も振らず

五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引きければ、我が子ながらも義平はよく駈けたるものかな。あ、駈けたりとぞ譽められける。大將重盛、與三左衛門景安、進藤左衛門家泰、主従三騎かけ離れ、二條を東へ引かれければ、悪源太、鎌田にきつと目合せて、此所に落つるは大將とこそ見れ。返せや」と追つかけたり。既に堀川にて追つつめけるが、弓手の方に材木多く充ち満ちたるに、悪源太の乗り給へる馬かたなづけの駒にて、材木にや驚きけん、馬手の方へ蹴飛んで、小膝を折

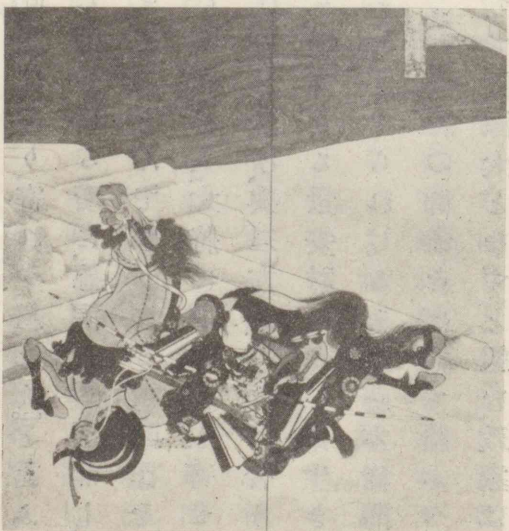
かたなづけ



(筆雅永川山) 盛重と平義

(筈)

つてどうと伏す。鎌田兵衛延さじと、十三束取つて番ひ、よつ引いてひやうと射る。重盛の射向の袖にはたと中りて飛返る。やがて二の矢を射たりければ、押附にちやうと中つて、のかつぎ碎けてをどり返れり。悪源太、これは聞ゆる唐皮といふ鎧御座んなれ。馬を射て、落ちん所を討て。」と下知せられければ、またよつ引いて追ひ様に、はずの隠るゝ程射こみたり。馬は屏風をかへす如く倒るれば、材木の上にはね落され、胄も落ちて、大童になり給ふ。鎌田堀川を馳越えて、重盛に組まんと落合ふ。重盛近附けてはかなはじと思はれけん、弓のはずにて



(筆雅永川山) 盛重と平義

(弭)

(一)今の河南省開封道滎陽縣
(二)主辱めらるれば臣苦しむ。上下相與に同憂すること久し(韓非子)

鎌田が冑の鉢をちやうと突く。突かれてゆらふる間に、冑を取つてうち著つゝ、緒を強くこそ締められけれ。
與三左衛門馳寄つて中に隔り、申しけるは、漢の紀信は高祖の命に代りて滎陽の圍を出し、遂に天下を保たせき。(一)主辱めらるゝ時は臣死す。(二)と言ふに、あらずや。景安此所にあり、寄れや、組まんと言ふまに、鎌田兵衛と引組んで取つて押へける所に、惡源太馬引起し、これも堀川を馳越えて、重盛に組まんととんで懸りけるが、鎌田をや助くる。大將をや討たんと。思案しけれども、大將にはまたも寄せあふべし。政家を討たせてはかなはじと思ひ、與三左衛門に落合うて、三刀刺して首を取る。重盛は、頼み切つたる景安討たせて、命生きて何かせん。とて、既に惡源太と組まんとせられけるを、進藤左衛門馳來り、家泰が候はざらん所にてこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれ。とて、我が馬を引向け、中に隔てて惡源太とむずと組む。政家は重

手形

(一)實業家、東洋生命保險株式會社社長、三重縣の人。明治七年生。

盛に組まんとしけるが、主を討たせてはかなはじと思ひければ、進藤左衛門に落重なつて首を搔く。この間に重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば、助り難き命なり。
十二月二十七日の巳の刻ばかりの事なるに、一むら雨さつとして、風は烈しく吹きたりけり。鎌田が鞍の前輪にも、氷柱いたれば、乗りがねたり。惡源太これを見給ひて、手形をつけて、乗れや。と宣ひければ、打物抜いて、つぶくと手形を切つてぞ乗りたりける。鞍に手形をつくる事、この時よりぞ始れる。 — 平治物語 —

一三 圍碁と事業

(一) 木村雄次

いはゆる下手の横好で、勿論ざる碁の域は脱しないが、私は圍碁を好む。そして私が碁を好むのは、幽室に對坐して靜かに碁を圍み、

心氣轉換

心は睡僧と共に閑なりといった風な禪味を好むからではない。否、それを味ははうなどといふ隠居じみた氣持はない。唯忙中に閑を偷んで群客騒然たる一隅に陣取つて、或は諧謔を弄しつゝ、或は皮肉を交へつゝ、茶を飲み菓子を頬ばりながら、勿々乎として一局を終へる事を好む。蓋し心氣轉換の最良法だからである。

碁を圍むには、先づ一定の計畫を立てねばならぬ。中を取るか、隅を取るか、どこの隅は捨ててどこで大きく取るかなどはそれであるが、しかし、その計畫は常に柔かみをもつてゐねばならぬ。何となれば、相手の方の出やうを顧ず、自分の計畫ばかり遮二無二遂行しようとするれば、必ず敗れるからである。事業に明確精密の計畫を要するは言を俟たないが、その計畫は軟性でなくてはならない。即ち社會の趨勢、人心の傾向、景氣不景氣、競争者の態度、さては自分の資力、人材の力、それ等によつて、當初の計畫を適宜に變更し鹽梅する

遮二無二

支離滅裂

猪突する

後手に落ちる
先手を取る

餘裕と應變の才とを要する。

碁の目的は地を廣く取るにある。成るべく少い石で、成るべく廣い地域を占領せねばならぬ。さすれば、その當然の結論として、隅を取る事が有利となる。けれども、相當の用意がなくて隅ばかり狙へば、敵の爲に自分の石は連絡を断たれ、支離滅裂となつて敗れるであらう。事業をするにも、世間との連絡や、先輩友人との連絡や、事務組織内の連絡を全うせず、むやみに有利な所へばかり猪突すれば、案外手痛い失敗を招く事がある。碁は勝たんと欲して敗れ、敗れざらんと欲して勝つ。碁は堅く打たねばならぬが、しかし、堅い一方に偏すれば、常に後手に落ちて負けてしまふ。だから、常に先手を取る事に心掛けねばならぬと共に、大局に眼を注いで、各方面に有效な石を置かうと心掛けねばならぬ。私の半生を費した銀行業は、最も堅實を尊ぶ事業である。一利を得るは一害を除くに如かぬ場合

が多かつた。しかし、それでも堅い一方で古い得意先ばかり守つてゐれば、自然營業は後手に落ちて、遂に大切な古い得意先までも他から奪はれてしまふ虞がある。だから、間斷なく良い得意先を新たに開拓して行かねばならぬ。

近頃たづさはつてゐる生命保險業も、もとより堅實第一でなければならぬが、堅實々々とばかり言つて、解約防止のみに腐心して、新契約を得る事に努力せねば、會社は自然に衰微するより外ないであらう。事業はむづかしい。消極に偏するも敗れ、積極に偏するもまた敗れる。消極のうちには積極があり、積極のうちには消極がなければならぬ。その間の消息は碁を圍む者の會得する所である。

その間の消息
先見の明

碁に尊ぶものは先見の明である。名人はよく幾百手の先を見るといふ。私どもでは十手先もむづかしい。それと同じ様に、事業をするにも、多少なりとも先見の明のない者は必ず失敗する。相手の地

捨石

と定まつてゐる所に打ちこみ、奮戦力闘大いに努め、最後の二眼に到つて、あゝやはり敗けなのかと氣附く事は、よく私どもの様な下手の打手に多い。無用の心勞と經費とをかけて、かち得たものは失敗であるといふ様なみじめな事のない爲には、事業家には二つの肉眼の外にもう一つの眼がある。肉眼の後に、將來を見る望遠鏡を据附けて置かねばならぬ。名人や上手にはないものかも知れぬが、私どもの碁には捨石がある。これは先見の明なき石であらう。しかし、その石が置かれてあつた爲に、敵の攻撃意の如くならず、或は自分にも豫想しない風に石が續いて生きる事がある。

事業に打算は勿論缺く事の出来ない事であるが、その打算が常に餘りに眼前的だと事業は伸びぬ。また事業に氣品を缺く様にもなる。現在はこの經費がどんな効果をもたらすか不明の場合でも、捨てた積りで出す必要が時にはある。關係事業の調査や研究に、經

鳥鷺を戦はす

(一)小説家、批評家、
文學博士、醫學博士、
博士、軍醫總監、
名は林太郎、
根縣の人、大正
十五年歿、年六

費を出し惜しみたくなるのが企業家心理でもあらうが、捨てた積りの出費が案外の効果を奏したり、とても使へさうもない人と思つて捨扶持をやつてゐると、その人が案外に能力を發揮するといふ様な事もある。我が國の豫算にも、目前に効果のない理化學研究に、せめて毎年軍事費の十分の一くらゐでも計上されたなら、行詰つてゐる我が國民經濟も、案外其所から打開されないものでもあるまい。碁も戦であり、事業もまた戦である。兩者相似たる所、頗る妙味の盡きざるを覺える。忙中の小閑、鳥鷺を戦はす毎に、つい思ひ合されて、獨りほゝるむ事屢である。

一四 觀潮樓雜稿

森 鷗 外

我が長は機を見て程好く現すべし。若し然らずして鋒を藏むるに過ぐる時は、人に看過せらるゝ虞あり。また餘り多く現す時は、忌

微瑕 穎脫

藏拙



森 鷗 外

唯請ふらくは知れ、藏拙は悪しき事にあらざるを。これ自ら價を定むる法なり。我思ふに、この藏拙の教は世に全人なきが爲に、人に短所なきはあらざるが爲に、その重みを加ふる

まれ、妬まれ、人に微瑕を見出されて、その微瑕を言ひふらさるゝ、こ
と大疵の如くなるに至る。唯請ふらくは知れ、穎脫は悪しき事にあ
らざるを。我が短は必要に迫らるゝに、あらざるゝに、あらざるゝに、

なり。人の短を言ふこと勿れとは、たゞに徳を立つる上の教のみならず、また世に處する上の教なり。人の短によりて我が長を示さんと

するは、盲ひたる者と聰を争ひ、侏儒と背較べせん如し。

輕々しく人を貶しむること勿れ。人の何故にかくの如く行ひて、何故にかくの如く行はざるかを知らんと欲せば、先づ己を人の地に置いて思ひ量らざるべからず。こは頗る難き事なり。就中知り易からざるは大なる人物の上にて、その喜怒哀樂の情の常の人に異なる、その常の人の毀譽に重きを置かざるとは、その行跡を奇怪ならしめ、ばからしめ、規矩準繩に入らざらしむ。その知り易からざるも宜なり。茲に實世間に處する便法あり。人の行をば行として見よ。その社會に及すべき影響を見よ。而してそのこの行ある所以の動因を問はざれ。動因の絲を手繰りて、自利利他の辨析に立入る時は、汝の穿鑿は或は斷案を得ざるに止み、或は妄斷に止むこと最も多かるべければなり。この法は餘りに粗なるが如く、

規矩準繩

十把一束

春の日のたく
るもしらでい
さなとる物語
きく沙の上の
舟

高港

假借す

十把一束なるが如しと雖も、これによりて汝が眼中一の大人物を見失ふ虞はあらざらん。そはこの種の人は、たとひ一面、自家に不利なる事と、社會に不利なる事とを爲す事を免れざらんも、また一面、必ず大いに社會を利する事な

春廻日乃刀丘累毛
之樂互鯨捕留物語
杵入沙曲辰上舢舟

高港

蹟筆外鷗森

×

よとなり。この心得だにあらば、罵言は世間の爲に風俗を矯むる利あるべく、一身の爲に信用を長ぜしむる益あるべし。これに反して、座上の談その流弊に及ばん時、汝若し大いに寛宥假借せば、人輒ち

談柄

汝を以てこの弊に染りたる者となさん。獨りゐて退屈するは、我の我に厭きたるなり。この厭倦の生ぜざらん事を欲せば、書籍中よりなりとも、實世界よりなりとも、新しき思想を取來りて、我の我と語らん時の談柄とせよ。

一五 蓬萊山

一 蓬萊山

蓬萊山には千歳ふる、萬歳千秋かさなれり。

松の枝には鶴巢くひ、巖のそばには龜遊ぶ。

二 萬劫年ふる

萬劫年ふる龜山の、下は泉のふかければ、

苔むす岩屋に松生ひて、梢に鶴こそ遊ぶなれ。

三 松の木蔭

松の木蔭に立ちよれば、千年の緑ぞ身にはしむ。

梅が枝かざしにさしつれば、春の雪こそ降りかゝれ。

四 鶴の群れある

鶴の群れある松山に、千代に千歳を重ねつゝ、

齡は君がためなれや、天の下こそどのどかなれ。

一六 鉢の木 その一

ワキ次第、行方定めぬ道なれば、來し方もいづくならまし。詞、これ
は一所不住の沙門にて候。我この程は信濃の國に候ひしが、餘りに
雪深くなり候程に、先づこのたびは鎌倉にのぼり、春になり修行に
出でばやと思ひ候。道行、信濃なる、淺間の嶽に立つ煙をちこち人の
袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友野里、今ぞ浮世を離坂、

シテ 佐野源
左衛門
常世の
妻、北條時
頼、
ツレ
ワキ
〔一〕信濃なる淺間
の嶽に立つ煙を
ちこち人の見や
はとがめぬ伊
勢物語、在原業
平、
〔二〕長野縣北佐久郡
岩田町にある
〔三〕同郡伴野郷。今
は岸野村の字。
〔四〕同郡離山のこと。
輕井澤と香掛と
の間。

(一) 群馬縣碓氷山中から流れ出る川
(二) 同縣碓氷郡板鼻町
(三) 同縣群馬郡佐野村で、烏川沿岸にある波場

(四) 狭布の里にかけ、陸奥にある細布の産地

墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡に著きにけり。
ワキ詞、急ぎ候程に、上野の國佐野の渡に著きて候。あら笑止や、また雪の降り來りて候。この所に宿を借らばやと思ひ候。いかにこの屋の内へ案内申し候。ツレ、誰にてわたり候ぞ。ワキ、これは修行者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。ツレ、易き御事にて候へども、主の御留守にて候程に、御宿はかなひ候まじ。ワキ、さらば御歸りまでこれに待ち申さうずるにて候。ツレ、それはともかくもにて候。わらはは外面へ出でむかひ、この由を申さばやと思ひ候。

シテ詞、あ、降つたる雪かな、いかに世にある人の面白う候らん。それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴鷲かかしやを著て立つて徘徊すと言へり。されば今降る雪も、もと見し雪に變らねども、我は鶴鷲を著て立つて徘徊すべき、袂も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥(四)のけふの寒さをいかにせん。あら面白からずの雪の日やな。詞、あら思ひ寄ら

(一) 群馬縣群馬郡八幡村大字根小屋の舊名
曲もなや

ずや、この大雪に何とてこれに佇みて御入り候ぞ。ツレ、さん候。修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候程に、御留守の由申して候へば、御歸りまで御待ちあらうずる由仰せ候程に、これまで参りて候。シテ、さてその修行者はいづくにわたり候ぞ。ツレ、あれに御入り候。ワキ、我等が事にて候。未だ日は高く候へども、餘りの大雪にて前後を忘れて候程に、一夜の宿を御貸し候へ。シテ、易き程の御事にて候へども、餘りに見苦しく候程に、御宿はかなひ候まじ。ワキ、いや、見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜を御貸し候へ。シテ、とめ申したくは候へども、我等夫婦さへ住みかねたる體にて候程に、なか、御宿は思ひも寄らぬ事にて候。これより十八町あなたに、山本の里とてよき泊の候。日も暮れぬさきに、一足も早く御出で候へ。ワキ、さてはしかと御貸しあるまじにて候か。シテ、御いたはしくは存じ候へども、御宿は参らせ難う候。ワキ、あら曲もなや。よしな

(一) 新古今集卷六、藤原定家の歌、和歌山縣東牟婁郡海邊にある三輪崎町。この西南に接して今大字佐野の名が残つてゐる。
 (二) 一樹の下に宿し、一河の流を汲み、一夜同宿皆これ先世の結明眼論。

き人を待ち申して候ものかな。
 ツレ詞あさましや、我等斯様に衰ふるも、前世の戒行つたなき故なり。せめては斯様の人に値遇申してこそ、後の世の便りともなるべけれ。然るべくは御宿を参らせ給ひ候へ。ツレ、さ様に思し召さば、何とて以前には承り候はぬぞ。いや、この大雪に遠くは御出で候まじ、某追附き留め申し候べし。なう、旅人、御宿参らせうなう。餘りの大雪に申す事も聞えぬげに候。いたはしの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ、今降る雪に行方^{ゆき}を失ひ、一所に佇みて、袖なる雪をうち拂ひうち拂ひし給ふ氣色、古歌の心に似たるぞや。駒^(一)とめて袖うち拂ふ蔭もなし、佐野の渡の雪の夕暮。斯様に詠みしは大和路や、三輪が崎なる佐野のわたり、地、これは東路の、佐野の渡の雪の暮に、迷ひ疲れ給はんより、見苦しく候へど、一夜は泊り給へや。歌^(二)げにこれも旅の宿、かりそめながら値遇の縁、一樹の蔭のやどりも、この

日本一の事

世ならぬ契なり。それは雨の木蔭、これは雪の軒ふりて、うき寝ながらの草枕夢より霜や結ぶらん。
 ツレ詞、いかに申し候。御宿は申して候へども、何にても候へ、参らせうざる物もなく候はいかに。ツレ、をりふしこれに粟の飯の候程に、苦しからずば参らせられ候へ。ツレ、さらばその由申し候べし。いかに申し候。御宿をば参らせて候へども、何にても参らせうざる物もなく候。をりふしこれに粟の飯のある由申し候。苦しからずば聞し召され候へ。ワキ詞、それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。ツレ、なう、聞し召されうざると仰せ候。急いで参らせられ候へ。ツレ、心得申し候。ツレ、總じてこの粟と申す物は、古へ世にありし時は、歌に詠み詩に作りたるをこそ承りて候に、今はこの粟をもつて身命を繼ぎ候。げにや、盧生が見し榮花の夢は五十年、その邯鄲の假枕、一炊の夢の覺めしも、粟飯炊ぐ程ぞかし。哀れやげに我もうちも寝て、夢にも

昔を見るならば、慰む事もあるべきになう御覽ぜよか程まで、地
 「住みうがれたる故郷の、松風寒き夜もすがら、寝られねば夢も見ず、
 何思出のあるべき。」
 「シテ、夜の更くるについで次第に寒くなり候。何をがな火に焚い
 てあてまゐらせ候べきや、思ひ出したる事の候。鉢の木を持ちて候。
 これを切り火に焚いてあて申し候べし。ツキ、げに、鉢の木の候
 よ。シテ、さん候。某世にありし時は、鉢の木に好き、數多木を集め持ち
 て候ひしを、斯様の體に罷りなり、いや、木好きも無用と存じ、皆
 人に參らせて候。さりながら、今も梅櫻松を持ちて候。あの雪もちた
 る木にて候。某が祕藏にて候へども、今夜のおもてなしに、これを火
 に焚き、あて申さうずるにて候。ツキ、いや、これは思ひも寄らぬ
 事にて候。御志は有難う候へども、自然また御事世に出で給はん時
 の御慰にて候間、なか、思ひも寄らず候。シテ、いや、とてもこの身

は埋木の、花咲く世にあはん事、今この身にはあひ難し。ツレ、唯いた
 づらなる鉢の木を、御身の爲に焚くならば、シテ、これぞ誠に難行の、
 法の薪と思し召せ。ツレ、しかもこの程雪降りて、シテ、仙人に仕へし



(小堀柄音筆)

雪山の薪
 ツレ、かく
 木こそあら
 め。シテ、我
 も身を、
 地捨人の

(一) 池の凍の東頭
 は風度つて解け
 窓の梅の北面は
 雪封じて寒し
 (和漢朗詠集 藤
 原篤茂)
 (二) 山里の梅の花
 け垣の梅の花
 かななる人の見
 といふらん
 (菅
 原道真)

爲の鉢の木、切るとてもよしや惜しからじと、雪うち拂ひて見れば、
 面白やいかにせん、先づ冬木より咲きそむる窓の梅の北面は、雪封
 じて寒きにも、異木より先づ先立てば、梅を切りやそむべき見じと
 いふ、人こそ憂けれ山里の、折りかけ垣の梅をだに、情なしと惜しみ

(一) 御垣守衛士の焚く火の夜はもえて書は消えつものなこそ思へ一詞花集大中臣能宣
(二) 一山
(三) 一山

しに、今更薪になすべしと、かねて思ひきや。櫻を見れば春毎に、花少し遅ければ、この木やわぶると、心を盡し育てしに、今は我のみわびて住む、家櫻切りくべて、緋櫻になすぞ悲しき。シテ、さて松はさしもげに、地枝をため葉をすかして、かゝりあれと植ゑ置きし、そのかひ今は嵐吹く、松はもとより煙にて、薪となるもことわりや。切りくべて今ぞ御垣守衛士の焚く火は御爲なり、よく寄りてあたり給へや。

ワキ詞、近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候。シテ、御出でにより我等も火にあたりて候。ワキ、いかに申し候。主の御名字をば何と申し候ぞ、承りたく候。シテ、いや、某は名字もなき者にて候。ワキ、何と仰せ候とも、たゞ人とは見え給はず候。自然の時の爲にて候。何の苦しう候べき、御名字を承り候べし。シテ、この上は何をか包み候べき。これこそ佐野の源左衛門尉常世が成れる果にて候。ワキ、それは何とて

さんぐの體

(一)北條時頼

著到に附く

(二) ちが原のさしめ草我世の中にあらん限りは一この歌は京都清水観音の詠歌と傳へられてゐる

斯様にさんぐの體には御成り候ぞ。シテ、その事にて候。一族共に押領せられて、斯様の身と成りて候。ワキ、なう、それは何とて鎌倉へ御のぼり候ひて、その御さは候はぬぞ。シテ、運の盡くる所か、最明寺殿さへ修行に御出で候上は候。斯様におちぶれては候へども、御覽候へ、これに物具一領、長刀一えだ、またあれに馬をも一匹繋いで持ちて候。これは只今にてもあれ鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりともこの具足取つて投げかけ、さびたりとも長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳參じ著到に付き、さて合戦始らば、地かた敵おほせいありとて、一番に割つて入り、思ふ敵と寄り合ひ打合ひて、死なんこの身の、このまゝならば徒に、飢に疲れて死なん命、何ぼう無念の事さふぞ。ロンギワキ、よしや身の、かくては果てじ唯頼め、われ世の中にあらん程、またこそ參り候はめ。暇申して出づるなり。シテ、ツレ、名殘惜しの御事や。初めはつゝ、む我が宿の、さも見苦しく候

へど、しばしはとまり給へや。ワキ、とまる名残のまゝならば、さて幾たびか雪の日の、シテ、ツレ、空さえ寒きこの暮に、ワキ、いづくに宿を狩衣、シテ、ツレ、今日ばかりとまり給へや。ワキ、名残は宿にとまれども、暇申して、シテ、ツレ、御出でか。ワキ、さらばよ常世。シテ、ツレ、また御入り。地、自然鎌倉に御のぼりあらば御尋ねあれ、けうがる法師なり。かひくしくはなけれども、公方の縁になり申さん。御さた捨てさせ給ふなど、言捨てて出船の、共に名残や惜しむらん。

一七 鉢の木 その二

後ジテ詞、いかにあれなる旅人、鎌倉へ勢ののぼると言ふは真か。何夥しくのぼる。さぞあるらん。東八箇國の大名小名、思ひく、の鎌倉入り、さぞ見事にて候らん。白金物打つたる絲毛の具足に、金銀を延べたる太刀かたな、飼ひに飼うたる馬に乗り、乗替、中間きらびやか

後ジテ 源左衛門尉常世 北條時頼 頼朝の侍 狂言 太刀持

足弱車

に、うち連れうち連れのぼる中に、常世が常に變りたる馬、物具や打物の物、その物にあらざる氣色、さぞ笑ふらんさりながら、所存は誰にも劣るまじと、心ばかりは勇めども、勇みかねたる瘦馬の、あら道おそや。地、急げども急げども、弱きに弱き柳の絲の、シテ、よれによれたる瘦馬なれば、地、打てどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乗り力なければ追ひかけたり。

ワキ、詞、いかに誰かある。ワキ、ツレ、御前に候。ワキ、國々の軍勢共は皆々來りてあるか。ワキ、ツレ、さん候。悉く参りて候。ワキ、その諸軍勢の中に、いかにもちぎれたる具足を著、さびたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身控へたる武者一騎あるべし。急いで此方へ來れと申し候へ。ワキ、ツレ、畏まつて候。いかに誰かある。狂言、御前に候。ワキ、ツレ、君よりの御誕には、諸軍勢の中にちぎれたる具足を著、さびたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身控へたる武者あるべし。急いで尋ねて御前へ参

(一) 石川縣河北郡森本村
 (二) 富山縣下新川郡三日市町邊の舊莊名
 (三) 群馬縣碓氷郡松井田町
 (四) 「かみつけぬ佐野の船橋とりはなし親はさくれどわはさかれがへ」萬葉集、上野國歌

勢づかひ、全く餘の儀にあらず、常世が言葉の末、眞か偽か知らん爲なり。また當參の人々も、訴訟あらば申すべし、理非によつてそのさた致すべき所なり。先づく、さたの初には、常世が本領佐野の莊、三十餘郷返し與ふる所なり。また何よりも切なりしは、大雪降つて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火に焚きあてし志をば、何時の世にかは忘るべき。いでその時の鉢の木は、梅櫻松にてありしよな。その返報に加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝、合せて三箇の莊、子々孫々に至るまで、相違あらざる自筆の狀、安堵に取添へたびければ、
 シテ、常世はこれを賜はりて、
 地、常世はこれを賜はりて、三たび頂戴仕り、これ見給へや人々よ。初め笑ひしともがらも、これ程の御氣色、さぞ羨ましかるらん。
 地、さて國々の諸軍勢、皆御暇賜はり、故郷へとてぞ歸りける。
 シテ、その中に常世は、
 地、その中に常世は、よろこびの眉を開きつゝ、今こそ勇めこの馬に、うち乗りて上野や、佐野

の舟橋とりはなれし、本領に安堵して、歸るぞ嬉しかりける。
 觀世流謠曲

一八 土の藝術 荻原井泉水

私たちは自然のすべての物に對して、太陽にも、風にも、雲にも、鳥にも、蟲にも、木にも、草にも、それらの親愛を感じるのがあるが、そのうちでも殊に土といふ物に對して、最も深い親しみを感じる。草や木に對する愛と言つても、それは土から生えてゐる物であり、蟲でも鳥でも、私たちと一緒に土の上に生きてゐる物であり、山や川や沼や田といふ物も、土の感情の色々の現れなのだ。太陽ですらも、それを仰いで感ずるよりも、土に照りこむぬくみや光として感ずる方が多いのだから、すべての自然は土を根本とするとも言へるであらう。私たちの生命といふ物を考へてみても、その

(一) 俳人、名は藤吉、東京市の人、明治十七年生。

背負投を食はされる

命を支へてゐる米穀は土が供給してくれる物ではないか。そして私たちの肉體といふ物の永遠の故郷もまた土にあるのだといふ事を思へば、私たちは何としても土といふ物とは離れる事の出来ない血縁的の關係があるとも言へる。

いや、さうした理窟はどうにでも附けられる。かの關東の大震災の時私は東京にゐたが、その時の大きな驚駭は、言はゞ私たちが平生信賴しきつてゐた大地即ち土といふ物に、背負投を食はされた様なものだつた。しかし、それによつて、私たちは大地といふ物を少しも恨みはしなかつた。その一週間の後には、その同じ土の上にまた家を建てはじめたではないか。つまり、私たちは何としても土を信じ、土にたよつて行くよりし方がないのである。また私は平素、暇がなくて困つてゐるのだが、若し少しの暇でもあれば、畑でも耕してみたいと思つてゐる。これは遊の様な事になるかも知れぬが、

本能

素材

ともかく、これも土といふ物と實際に、(氣持の上ばかりでなく、土に手をよごして土のぬくみに觸れて)親しみたいといふ本能が私たちのうちにあるからだと思ふ。

さうした土といふ物を素材として一つの藝術を作るといふ事は、可なり古代から試みられてゐた。即ち土器である。日本の上古の遺蹟などから出る土器の様な物は、勿論實用品には違ないが、その形態には、當時の人の趣味や好みといふものが出てゐると思はれるし、それに模様を附けるといふ事も、確かに藝術的な要求から來てゐる事と思はれる。してみると、繪畫とか彫刻とかいふ美術の發達するより以前の、最も原始的な藝術としてこれを看做してもいいであらう。その土器のだん／＼進んで來た物が即ち陶器であつて、今日に於て最も原始藝術の味はひを存してゐるのも、またこの陶器であらうと思ふ。

用 體

一つの好い陶器——藝術的に作られた物——例へば、美しい形の皿に對すると、私たちは土といふ物に對する親愛の情を喚び起される。それは、ガラス器と比べて見るとよく分る。ガラス細工にもなか／＼精巧な物があり、また藝術的と稱すべき物もあるが、ガラス器から受ける感じはどうしても冷い。これに反して陶器から受ける感じは暖い。これはやはり土のぬくみの感じ、土に對する親しみによるのである。またガラス器は、器としての用だけを足して、その體を忘れさせる。ガラス器に果物が盛つてあると、人にその果物だけを印象させ、器はそれを載せてあるといふ役を完全に果してゐるが、器の體といふ物は、さして人の注意を惹かない。これに反して陶器は、器としての用をなすと共に、その體を強く現してゐる。陶器の皿に菓子盛つて出すと、菓子といふ物を印象させると共に、その皿の形や色といふものが、菓子と一緒に眼に訴へて來る。菓子

聯想する

(1) lemon tea.
紅茶にレモンの薄切を入れたもの。

藝術鑑賞

の様な物は、その美しさもまた味はひの一部であるが、それを盛つた皿の美しさも、また快感の重要な一部となつてゐる。私たちの食物といふ物は、或意味で土を聯想させる物だから、その食物を盛る物としては、土の器、即ち陶器といふ物が根本的に調和してゐるのだ。殊に日本の料理の様に視覚を重んずる物には、皿や鉢の美しさは、實に缺く事の出来ないものである。

一杯の茶を飲むにしても、⁽¹⁾レモンティーなどは暖いのをコップに入れるけれども、それと茶碗で緑茶を飲む氣持と比べると、前者は湯を醫せばいゝといふ風、後者は本當に「味はふ」といふ風がある。抹茶の式に茶碗の好みが研究され、それから幾多の名器が作られたといふ事も、コップ萬能の西洋人には分らない事で、東洋人特有の藝術鑑賞の力であり、誇るべき事だと言つてもいゝと思ふ。

壺といふ物を見ると、一層土の藝術としての味はひがよく分る。

暗示する

壺の圓み、据り、これが先づ土といふ物の抱擁性と、その安定性を象徴してゐる。壺の肌の潤ひ、艶色、調子、模様などは、また土といふ物の生命と、それがすべての物を生育する所の諸相とを暗示してゐる。一つの壺は一つの世界の姿だとも言へる。だから、壺は唯これを飾つて見てゐるだけでも飽きないが、これに花を活けると、それが實用品として生きて來る。これもまた單に花を支へる爲の用を爲すばかりでなく、一つの體として、花と共に眺められる物となる。花は土から咲出る。その土を象徴する物として、壺程しつくりした物はない。花の美しさと共に、壺の美しさといふものが考へられる。そして花の天然美と壺の藝術美とが相反映して、お互にその美を増し合ふのである。

さうした意味で、陶器即ち土の藝術といふものは面白いものであり、私たちの生活を明るくし、またそれに暖みを與へてくれるも

のである。陶器が實用品として私たちの生活に缺くべからざる事は言ふまでもないが、その藝術味といふ事がもつと分つて來なければ本當でないと思ふ。

— 山川行住 —

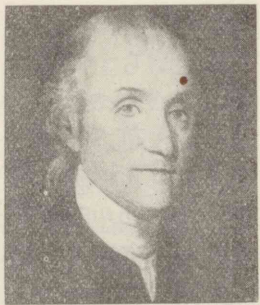
自修文

發明發見の根本

「何か大發明大發見をして、世間をあつと言はせてみたい」とは、恐らく萬人共通の心理であらう。しかし大發明大發見は、單なる好奇心だけでは決して成遂げられるものではない。これを成遂げた偉人の行跡に就いて見るのに、その成功の根本をなすのは、實に鋭敏な頭腦、周到な注意、撓まない努力の三要素である。凡そ發明發見の動機は、偶然の事實から起つてゐるものも少なくないが、以上の三要素を缺いてゐる者は、たとひ同じ事實を見ても、徒にこれを看過し、到底發明發見の動機として捉へる事は出來ないのである。今、次に少しくその實例を擧げてみよう。

① Joseph Priestley
 リーッ市の教會の牧師であつた。酸素の外、アンモニヤガス、一酸化炭素等數多の化合物を發見した。(西紀一七三三—一八〇四年)

② Lavoisier
 彼が使用したのレンズは直徑十二センチの集光レンズであつた。



—リトスリプ

空氣の成分としてその約五分の一を占めてゐる酸素は、西紀千七百七十四年、イギリスの化學者プリストリーによつて發見されたが、その發見の動機は、彼の祕藏してゐた一個の⁽¹⁾レンズから得たのである。即ち當時彼はそのレンズを燃焼ガラスと呼び、その焦點に色々の物質を置いてこれを熱し、それが燃えるの深く興味を感じてゐた。所が或時、酸化水銀をさうして熱してゐると、何か一種のガスが發生するではないか。眼敏くもそれを認め、めた彼は、そのガスをガラス壺の中に集めて、様々の實驗を試みてゐるうちに、蠟燭の火がその中で猛烈に燃える事を知り、遂にそれが酸素である事を發見したのである。一體、酸化水銀は、空氣中で水銀を徐々に熱して作られる物であるから、當時その製作に従事した者は、これを過熱した事もあつたに違なく、隨つてこれから酸素が出た事

③ Argon
 ④ percent

⑤ Lord Rayleigh
 ケンブリッヂ大學物理學教授。(西紀一八四二—一九一九年)

⑥ Sir William Ramsay
 イギリスの化學者。ロンドン大學化學教授。(西紀一八五二—一九一六年)

もたび／＼あつたらう。しかもそれ等の人々はこれに氣が附かず、レンズの實驗から、明敏な頭腦の持主たるプリストリーによつて偶然發見されたのである。

① アルゴンといふガスは、近頃電球に封入されてゐるので、一般によく知られてゐるが、このガスは、空氣中に一パーセントも含まれてゐるに拘らず、その性質が窒素に頗る似てゐる爲、永い間注意されずにゐた。所が十九世紀の終になつて、イギリスの物理學者レーレー卿は、偶、空氣中の酸素、水分、炭酸ガス等を除いた窒素と、化學的に得た窒素との重量を比べて見ると、極めて僅かではあるが、兩者の間に差違のある事を發見した。普通ならば、そんな僅かの差違は當然ありがちの事として看過するのであらうが、自己の實驗を信頼する事の頗る深いレーレー卿は、ラムゼーと共に鋭意研究した結果、遂に千八百九十四年、空氣中からアルゴンを分離する事に成功した。

(1) Galileo Galilei
數學者、物理學者、天文學者、(西
紀一五六四—一
六四二年)
(2) Piss.

(3) Justus Freiherr
von Liebig
有機化學殊に動
物アルコール
等に関する方面
の基礎を開いた。
(西紀一八〇三
—一八七三年)
母液
溶解液から結晶や
沈澱物を取去つ
た残りの液をい



かのイタリーの科學者ガリレイが、十八歳の時ピサの寺院に詣で、釣ランフが風で振動してゐるのを見て、釣紐の長さが一定してゐれば、振幅の大小に拘らず、何れも同一時間に一振動を終るといふいはゆる振子の法則を發見した事や、イギリスの物理學者ニュートンが、熟した林檎の自然に梢を離れて地上に落ちるのを見て、萬有引力の法則を發見した事は餘りにも有名な話であるが、これ等と反對に、研究心の足りなかつた爲に、あたら發見の名譽を逸した例は、これをリービッヒ卿の事蹟に見る事が出来る。リービッヒ卿は有機化學の祖として有名なドイツの化學者であるが、或時、食鹽製造の際の母液を研究してゐると、これより一種の刺

(4) Label の轉訛。

(5) Antoine Jerome
Balard.
フランス大學化
學教授。(西紀一
八〇二—一八七
六年)

戟臭の強い濃褐色の液體を抽出する事が出来た。この物は沃度の鹽化物によく似てはゐるものの、少し違ふ所もあつたのに、彼はこの偶然の獲物に就いて別に興味を寄せず、その壘に「沃度の鹽化物」といふレッテルを貼つて、はふつて置いた。すると、それから數箇月を経て、それは千八百二十六年の事であつたが、フランス人バラールが、同様の經過によつて臭素といふ新元素を發見したとの報告に接し、驚いて實驗室の片隅に置いた例の「沃度の鹽化物」を取出して調べてみた所、全くこれと同一物であつたので、臭素發見の名譽を逸した事を知り、それが一に自分の平常の不注意と早合點とに由る事を後悔したといふ。
以上の數例によつて、發明發見には、熱心な努力が必要であると同時に、偶然の出來事から眼敏くその動機を捉へる事が、いかに緊要であるかが知られるであらうが、さうして成遂げられた發明發見は、これを實用化する事によつて、一層その價值を増大

① Lazzaro Spallanzani. 博物學者。實驗生物學の祖(西紀一七九九年)。

② Frasco.

③ Francois Appert. 物理學者。元菓子商(西紀一八四一年)。



ルベッア

するのである。かのイタリアのスパランツァニは、^(一) フラスコ内に栄養液を入れ、これを沸騰した湯の中に數十分間浸した後、フラスコの頸を熱して溶し密封した所、空气中に放置した栄養液は速に分解して混濁悪臭を發するのにかうして密封した物は、何時までも最初の外觀を失はなかつたので、彼はこれによつて、微生物は栄養液中に自然に發生する物でない事を證明する事が出來た。しかし、斯様に微生物の自然發生を否定しただけでは、たゞひ學問上頗る有益であつても、實用上には何等の直接交渉がないのである。所が、その後間もなくフランスの^(二) アッペールによつて、この原理が食物の貯藏に應用された。即ちナポレオンが軍事上の必要から、食鹽や砂糖の様な防腐劑を用ひない食物貯藏法の懸賞募集を行つた際、アッペールはこの壘詰法をもつて應募し、見事審査に合格して、一

④ Franc. (法)

⑤ Antoon van Leeuwenhoek. 博物學者。微生物研究の祖(西紀一六三二年)。

⑥ bacteria. (細菌)

⑦ Plenciz.

⑧ Louis Pasteur. 生物化學者。物理學者(西紀一八二一年)。

⑨ Vaccin. 病原體で製した免疫材料。

萬二千フランの賞金を得たのである。しかし、それはナポレオンの敗退した爲に軍事上には利用されなかつたけれども、その後、罐詰法として、たゞに軍事上のみならず、廣く一般家庭に於ても重寶な物となつた。



クフンエウウレ

また千六百八十三年、オランダの^(一) レウウェンフックによつて、^(二) バクテリアが發見されたが、バクテリアの發見だけでは、實用上の價値はない。それを千七百六十二年オーストリアの^(三) フレンチツが醫學上から研究し、すべての傳染病はバクテリアその他の微生物に原由する事を發見し、更にフランスの^(四) パスツールがこの病原菌の^(五) ワクチンを發見して、茲に始めて醫療上の大革命をもたらしたのである。これを要するに、發明發見の目ざす所は、人類生活の向上、幸福

(一) 工學博士。三重縣の人。明治二十六年生。
 (二) 理學博士。東北帝國大學總長。金屬材料研究所長。愛知縣の人。明治三年生。
 特殊合金鋼 世界で最も優秀な磁石(鋼)で鋼鐵にコバルト、タンクステン、クロム等を加へたもの。本多博士は、奨学金を提した男爵住友吉左衛門の名に因んでこれをK.S.鋼と命名した。
 (三) 農學博士。大分縣の人。安政四年生。
 (四) South Africa. フリカ地方の海岸に多い海鳥の糞

の増進、産業の發達でなければならぬ。世界の最大富國と稱せられるアメリカは、その工業の八割五分が直接間接に發明によつて居り、これ等工業會社の得る一箇年の利益は、世界の金、銀、金剛石等の年産額よりも大きいと言はれる。これによつても、發明發見がいかに國家産業の發達に資する所が大きいかが分らう。翻つて我が國の發明界を見るのに、昭和三年度の特許出願件數は世界第三位、同特許登録件數は第五位を占めてゐる。そして從來餘り振はなかつた工業上の發明も、近年次第に増加の傾向を示し、豊田佐吉氏の自動織機^(一)、丹羽保次郎博士の寫眞電送方式^(二)、本多光太郎博士の特殊合金鋼等、世界に誇るに足る物が續出してゐる。一方新發見としては、恒藤規隆博士が大正七年以降數回探検船を派遣して、臺灣を距る西南約七百海里の海上に散在する無所屬無人島の新南群島に、良質の燐礦及び窒素を含有するグアノ^(三)が豊富に産出する事を發見したのなどは、最も注目に値する

物であらうか、る發明發見界の好潮に乗じ、國民全般が一層堅實な研究心を養成し、我が乏しい天然資源を有益な幾多の發明發見によつて補ひ、以て國力を充實せしめる事は、刻下の急務であると思ふ。

一九 春の川水

正岡子規^(一)

はんの木にからす芽を食むころなれや雲山を出でて人畑をうつ

落合直文^(二)

紅の二尺のびたるばらの芽の針やはらかに春の雨ふる
試に石をひろひて投げて見んねぶるがごとき春の川水
馬屋のうちに馬のもの食ふ音すらもかすかに聞ゆ夜や
更けぬらし

(一) 歌人。俳人。名は常規。松山市の人。明治三十五年歿。年三十六。
 (二) 歌人。國文學者。萩の家と號した。仙臺市の人。明治三十六年歿。年四十三。

人の子よ母を
もつ子よ母あ
らはたひにな
いてそ吾に悔
あり

直文

(一) 歌人。千葉縣の
人。大正二年歿、
年五十。

人の子よ母を
もつ子よ母あ
らはたひにな
いてそ吾に悔
あり

蹟筆文直合落

(一) 伊藤左千夫

天地の四方のよりあひを垣にせる九十九里のはまに珠
ひろひをり

高山も低山もなき地の果は見る目の前に天したれたり

あたゝかき心
こもれるふみ
もちて人おも
ひをればうく
ひすのなく

(二) 歌人、小説家。茨
城縣の人。大正
七年歿、年三十

あゝあゝの心も
もろて人おも
ひをればうく
ひすのなく

(一) 長塚

蹟筆 夫千左藤伊

麥の葉は天つ
ひはりの聲ひ
とほきひとは
てはに揺りも
てのふらし

(一) 歌人。號は李青。
子爵。岡山縣の
人。大正十四
年歿、年四十

(二) 歌人。本名は久
保田俊彦。長野
縣の人。大正十
五年歿、年五十

ガラス戸をすかして蚊帳に月さしぬあはれといひて起
きて見にけり
雨蛙しきりに啼きてをちかたの茂りほの白くむせびた
り見ゆ

麥の葉は天つ
ひはりの聲ひ
とほきひとは
てはに揺りも
てのふらし

蹟筆 節塚長

(一) 木下利玄

をち方にかぢ屋かねうつ音すみて秋や、動く八月の末
水引の根を洗ひ行く野の水のよどみにうつる秋の夕映
たかつきの梢にありてほゝじろのさへづる春となりに
けるかも

(一) 島木赤彦

旅にありて少
布をひさく
女一人ふりし
て来る雨にぬれ
赤彦

(一) 歌人、名は幾太
昭和二年、
四十二、
年

あらしの青の
木の葉のにお
もまかれたる
ほひかたし
空ははれつゝ
千櫻

いつくし

旅にありて少
布をひさく
女一人ふりし
て来る雨にぬれ
赤彦

蹟筆彦赤木島

山路にゆふべの雨の流したる松の落葉は片よりにけり
古泉千櫻
おり立ちてこの大ぜいのよろしもよ原のおほだをけふ
植うるかも

あらしの青の
木の葉のにお
もまかれたる
ほひかたし
空ははれつゝ
千櫻

蹟筆櫻千泉古

雪山のいたゞきひくゝかける鷹のむねのひかりをいつ
くしくみし

二〇 強い精神の勝利

(一) 永井 潜

(一) 生理學者、醫學
博士、東京帝國
大學教授、廣島
縣の人、明治九
年生

泰然自若

(二) 朱熹、宋代の大
儒、文公と諡す

(二) 精神的一元論の見地から考へると、精神が身體の上に偉大な力
を及す事は、寧ろ當然過ぎる程當然の事であらばならない。
人間は病氣に罹ると種々煩悶する。殊に念一たび死の運命に想
到して、その恐怖に囚はれると、病を一層悪化せしめる様な事は、不
幸にして甚だ屢々見る事實である。昔から病は氣からと言ふ様に、病
氣に罹つた際には、自己の運命に安んじ、泰然自若たる不動心が最
も大切である。この不動心があつてこそ、始めてよく病を征服する
事が出来るのである。

(三) 朱晦庵の言つた「陽氣の發する所、金石もまた透る。精神一到、何事
か成らざらん」といふ語は、誰しも知つてゐる所であるが、實際、精神
一到せば、いかなる事でも成就し得ないものはない。その昔、赤穂義
士討入の宵に、其角が「我が雪と思へば、輕し笠の上」と歎賞した時、日

(一) 赤穂四十七士の事。其角に師した。俳諧を善くした。
 (二) 李廣。漢の文武善くし、匈奴を討つて功があつた。

(三) 大正十二年九月一日の関東大震災を指す。

の恩やたちまち碎く厚氷」と大高源吾の子葉が酬いた事は、今も尙懐かしい語草になつてゐるが、その俳人子葉は、何のその岩をもとほす桑の弓と吟じてゐる。げに一念の凝る時、將軍の矢はよく岩をもとほす事が出来るのである。

観音經には「念力さかなれば、火に逢うても焼けず、水に入つても溺れず、白刃首に加るとも刀は段々に折れ、猛獸道に横たはるともおのづから遁竄す」といふ意味の句がある。精神の統一する所、誠に無限の妙力が出る。

すは火事だと聞いて、非常に重い荷物をも軽々と持運ぶ事が出来たり、いざ地震と驚いて、足腰の起たなかつた病人が活潑に運動して、それが動機となつて、終に何時しか運動の自由を恢復したといふ實話は、最近の大震災に際して少からず傳へられてゐる。醫治の上に、精神療法が意識的に無意識的に深甚な働をしてゐる事

處方

加持祈禱

(一) William James
 アメリカの心理學者(西紀一八四二—一九一〇年)

決河の勢

臆説

(二) 高等動物の體內に内分泌腺と稱するから、各種の腺が持つて、その分泌する特殊の成分が、血液の循環に及ぶ影響を及ぼすといふ學說を、腎臓の上部にあり、一種の内分泌腺であるアドレナリンと、血液の中に分泌されるアドレナリンはその作用を増進するものである。

は疑のない事實で、同じ處方でも、信賴の厚い名醫の手から與へられると、非常に卓效を奏したり、加持祈禱が信仰する者に奇蹟を顯したりするのは、これを迷信として一概に排斥する事は出来ないであらう。また虚弱な身體の所有者でありながら、旺盛な精神の力によつてよく健康を保持し、劇務に堪へ、大なる仕事を成就した例も決して少くはない。

心理學者ジエームズはこれ等の精神的偉力の効果を説明すべく、餘力説といふ意見を樹てた。それによると、人々は自覺しない餘力を具有してゐるもので、一朝有事の際、この餘力が決河の勢を以て迸り出ると言ふのである。ジエームズのこの説明は簡單明瞭ではあるが、しかし、單なる臆説に過ぎなかつたのである。然るに近時、内分泌學説の進歩によつて、以上の事實に對する合理的説明の與へられる端緒が開かれた。即ち精神の興奮が副腎のアドレナリン内分

榛荆を關く

(一) フランスの畫家
アライ・シェフ
エル(西紀一七
九五—一八五八
年)の言

泌作用を旺盛ならしめ、その結果筋力が増進するなどは、その一例である。
堅牢な骨格が人の身體を支持保護する様に、強い精神は人の行動を活躍發奮せしめるものである。鋭い天才の利鎌よりも、寧ろ根強い精力の棍棒が、榛荆を關いて目的へ前進するに役立つものである。鋭い刃はとかくこぼれ易い。少しく蹉跌せんか、失望落膽する危険が伴ふのであるが、精神の強い堅忍不拔な人は、いかなる事があつても、必ず成功しなければ止まない。古へより成功の條件として、運、鈍、根の三つを教へたのは、誠に故ありと言ふべきである。強い意志はあらゆる行爲に熱と力とを與へて、これを活躍せしめるものである。

強い精神の前には、何者も背を脱いでひれ伏すのである。努力し尙努力す——これぞ人生なる。さうしてこの努力すべき人生に、痛

累卵の危きに救ふ

(一) Persia

(波野)

(二) Xerxes

(西紀前五一九—前四六五年)

(三) Sparta

(Leonidas

(在位西紀前四九—前四八〇年)

(四) Thermopylae

ギリシャ國マリス、ロクリスの

兩地方の境にあ

る狭路

鏖殺する

い鞭となり、甘い林檎となり、これを激勵しこれを鼓舞せしめるものは、實に不撓不屈の強い精神でなければならぬ。

將士の強い精神が戦争に勝利をもたらす事は言ふまでもないが、これによつて國家を累卵の危きに救ひ、社稷を磐石の安きに置いた例證は、東西古今決して少くない。ペルシャ王クセルクセスが、八十萬の大軍を率ゐてギリシャに殺到した時、スパルタ王レオニダスは手兵僅かに三百、友軍を合せて六千足らずの寡兵を以て、テルモピレーの險を死守した。地勢がいかに要害であるとは言へ、殆ど二百倍に相當する大軍に當らうとするその壯烈な意氣には、流石のペルシャ王も心中懼をなして、寧ろ戦はずして敵を屈するの策を立て、軍使をレオニダスの陣營に送つて言ふ様、我が軍の放つ矢は天日を覆うて直ちに汝の軍を鏖殺せん。如かず、速に降服せんには」と。その時、賢明剛勇なスパルタ王は、莞爾として答へていはく、よし、さ

肉迫する

らば余は天日暗きその蔭に隠れて、汝の陣營に肉迫せんのみ。かくて戦の幕は開かれた。愛國の熱誠に勇氣千倍せるギリシャの軍勢は、幾たびか寄手を惱まし、眞に屍山血河の悲愴な奮闘をしたが、衆寡終に敵せず、あはれ名君レオニダスを始めとして、忠勇の士悉くテルモピレーの露と消果てた。

ギリシャの武人が外にあつてかくも崇高な勳功を國家の爲に樹てつゝ、あつた間に、スパルタに於ける政治家の態度は、因循姑息黨を立て牆にせめいで、國家の大事を忘れてゐた。テルモピレーの戦場に立てられた碑に、

「旅人よ、我等が永遠に此所に留る事を、ラケデーモンの人々に告げよ。我等は死に至るまで、卿等の命ずるまゝに忠實であつた」といふ句が鐫られたのを見ても、時人がいかにこの誠忠無二の英魂を景仰し痛惜したか、はたまた固陋頑迷な政治家を非難したか

(一) Lacedaimon, スパルタ人を指す。

(閱)

(1) Herophilos.

(2) Athenian.

(3) Salamis.

アツチカ半島とサラミス島の間にある灣。

(4) Horatio Nelson.

イギリスの提督(西紀一七五八—一八〇五年)

(5) Arthur Wellesley

イギリスの元帥政治家(西紀一七六九—一八五二年)

(6) Jeanne d'Arc.

フランスの女傑百年戦争の時母國の危難を救つた。(西紀一四一二—一四三一年)

(7) 鎌倉幕府第八代の執權時頼の子。弘安七年(一三九四年)歿。年八紘。

青史

竹帛に垂れる

を、想見する事が出来るのである。レオニダス王はかくして死んだ。しかも彼の強い精神は護國の鬼となつて、名將ヘロフィロスを激勵し、都を奪はれて海に浮んだアデン人を加護して、サラミス灣頭の決戦にペルシャの艦隊を撃破し盡し、強敵をして一敗地に塗れて、再び起つ能はざらしめたのである。

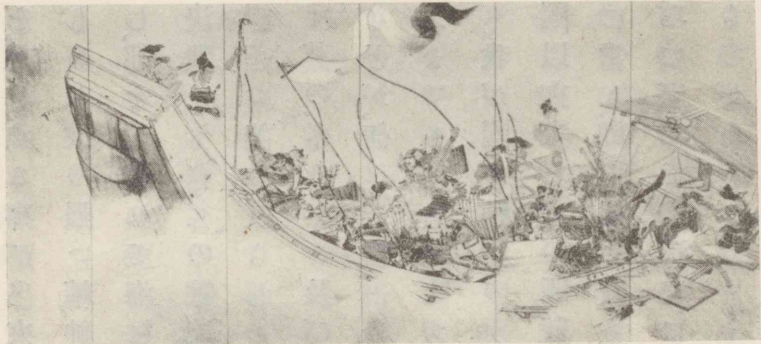
英のネルソン及びウェリントン、米のワシントン、佛のジャンダークなどが、何れも皆一身を以て國家の安危に任じた事は、事新しく言ふまでもないであらう。

我が國の歴史のうちにも、かういふ事例は少くはないが、殊に建國以來未曾有の國難に際會して、剛勇果斷毅然として起つてこれに當り、御稜威を八紘に輝かし、國運を萬世に繫いだ北條時宗の勳功に至つては、青史に宣揚し、竹帛に垂れ、永世忘れる事の出来ないものがある。

(一)元の世祖。太祖成吉思汗の孫。
(西紀一二九四年)

(二)第九十代。
(一九二六年)

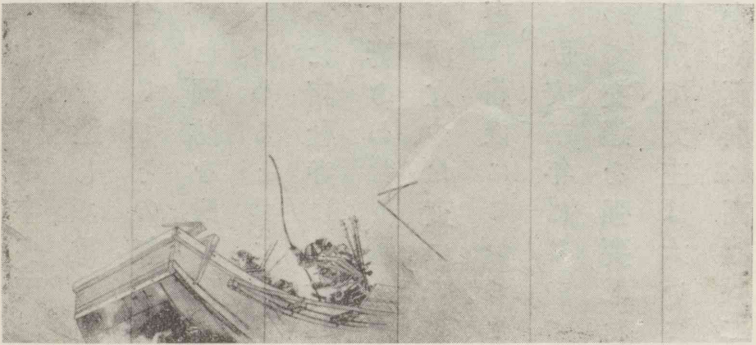
返牒



(筆雲大村小) 風神

史を按ずるに、元主忽必烈が父祖の餘威を挟み、曠世の大望を懷いて我が國を併呑せんとした事は、實に執拗深刻を極めたのである。即ち龜山天皇の御宇、文永三年、黒明殷弘を國信使として我が國に差遣したのを始めとして、同五年及び六年相次いで使を以て我に迫つた。朝廷では軟派が勝を占め、既に返牒を草して鎌倉幕府に示された程であつたが、時宗は蒙古の傲慢無禮を憤り、返牒を抑へてこれを遣さず、同八年に四度蒙古の使が來た時にも、幕府は斷乎として朝廷の返牒を握りつぶした。九年と十年とに來た五度六度の使をも、すげなく追還

(一)對馬國の領主。知宗の子。文永十一年(一九三四年)元兵と對馬の小茂田に戦つて死んだ。



(筆雲大村小) 風神

した。
是に於てか蒙古王は終に怒つて、十一年十月に船艦九百餘艘、蒙漢軍二萬五千、高麗軍八千人を以て先づ對馬を侵し、守護代宗助國がこれに死んだ。賊は轉じて壹岐に寇し、守護代平景高が力戦して死んだ。勝誇つた賊はこの兩島に入つて、殘虐悽愴、言ふに忍びざる暴行を敢へてし、進んで肥前の松浦から、十九日太宰府に迫つた。太宰少貳景資が奮戦これを防いだ、がなかく思ふに任せなかつた。然るに二十日夜大暴風が起つて、賊船の漂流するもの二百餘艘、溺死者一萬三千五百餘、さんくの敗北となつた。

(一) 第九十一代。
(二) 一九三五年。

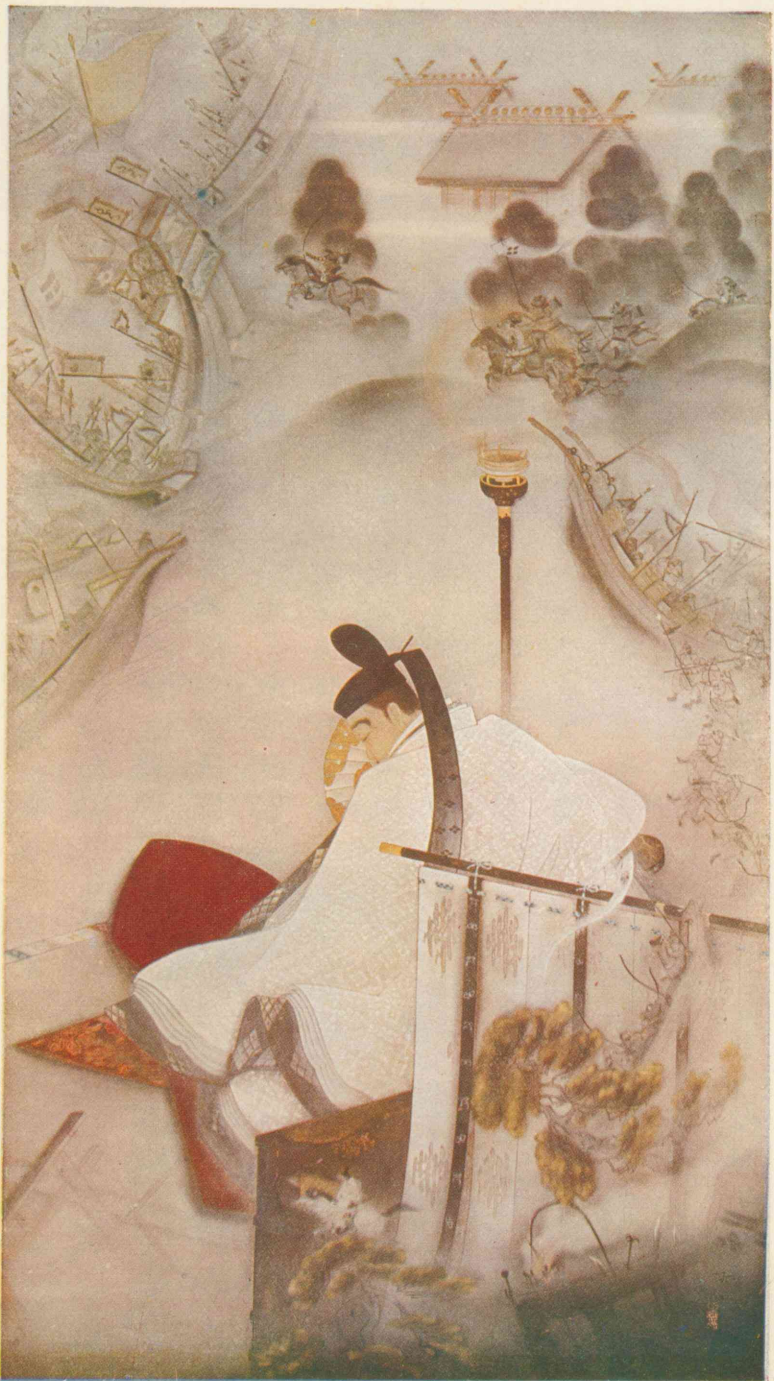
(三) 神奈川県相模
国鎌倉郡川口
村龍口寺の地
鎌倉幕府當時の
刑場

(四) 一九三九年。

櫛の齒を引く

次いで後宇多天皇の建治元年に、元主は執念深くも杜世忠、何文著等を遣して、重ねて修好を求めた。時宗はこれを鎌倉に檻致させ、召見してその無禮を責め、世忠等五人を龍口に斬つた。さうして大いに国防を嚴にし、公私の費用を節減し、ひたすら戦備を充實するに力めると共に、國民の士氣を鼓舞して、この空前の國難に備へた。また諸社寺には祈禱が行はれ、國難來の聲は期せずして津々浦々に響きわたり、國を舉げてこの大難を攘はんとする鬱勃たる元氣が湧立つた。實にこの時ほど我が大和民族の士氣が緊張激越した事は前後になかつたのである。

(四) 弘安二年になつて、元主は更に夏貴等四五の重臣を太宰府に送つて、交通を強要した。時宗は令してまたこれを博多に斬らしめた。其所で元主は大いに怒つて、弘安四年五月、范文虎等を將として、兵十餘萬、別に高麗兵二萬五千人を率ゐて入寇させた。急報は櫛の齒



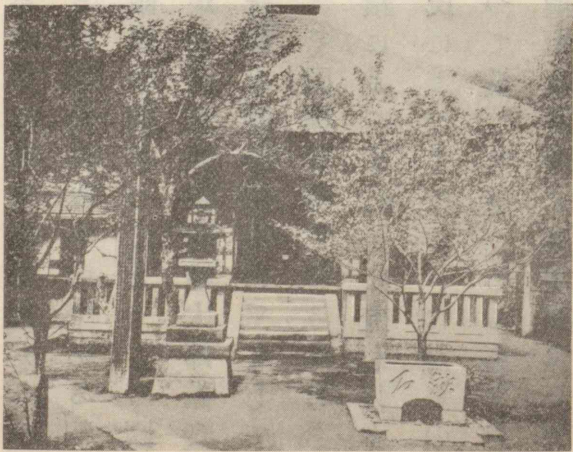
龜山上皇

高橋觀石筆

(一) 官幣大社日吉神社
滋賀縣比叡郡坂本村にある山麓にあり、山王權現とも言ふ。

(二) 長崎縣(肥前國)北松浦郡平戸町

を引く様に鎌倉に至り、實に我が國は今や危急存亡の岐路に置かれたのである。畏くも龜山上皇には親しく石清水に祈られ、次いで春日及び日吉社へ御幸せられ、また手書の願文を伊勢の大廟に奉じ、身を以て國難に代らんと祈らせ給うたのである。六月賊は平戸に迫つたが、我が軍がよく防いだので、賊船は近附く事が出来なかつた。勇士草野七郎河野通有、菊池武房、竹崎季長等が奮闘して大和武士の手並を示し、敵の膽を寒からしめたのは實にこの時であつた。さうして閏七月一日に、神風が俄に起つて海濤怒號し、虜艦皆覆り、溺死する者算なく、海



北條時宗廟

敵愾

(一) 頼山陽の「蒙古
來」と題する詩
中の句

秕政

中歩して渉るべしといふ有様であつた。これがいはゆる弘安の役であつたのである。かく文永、弘安前後兩回の侵入に當つて、その都度颱風が起つて虜艦を全滅させた事は、決して偶然とは思はれないのである。即ち神明の加護と、皇威の赫々と、國民の敵愾と相俟つて、よくこの國難を掃攘する事が出来たのであらうが、しかも我が相模太郎膽甕の如く、敢然として外侮を禦ぎ、内政を統御し、鐵心石腸凜乎として天下を負つて起つのが概があつた爲に、よく國運を傾危のうち全うする事が出来たのであつて、その功績によつて言へば、蓋し日本建國以來の第一人者と言ふべく、北條氏によつて行はれた幾多の秕政も、優に時宗のこの一大勳功によつて償つて餘りある事と思ふ。「國難來、國難來」我等は永久にこれを繰返して叫ぶ必要がないだらうか。今の日本を思ひ、將來の大和民族を念ひ、さうして七百年の昔

善處する

(一) 評論家、傳記作
家、鳥取縣の人、
明治二十七年生。

(二) 千葉縣(安房國)
安房郡の東北に
ある。海拔三八
三メートル。山
上に日蓮の修行
した清澄寺(眞
言宗)がある。
(三) 弘安五年(一九
四二年)武藏國
池上(今東京市
大森區)本門寺
で寂した。

に於て、我等の祖先がかくも強い精神を以て國難に善處し、皇運をして益隆興せしめ、國威を宣揚した事を追憶する毎に、私には唯熱い熱い涙が湧く。——人及び人の力——

二 日蓮と時宗

澤田 謙

蒙古襲來といふ世界的大事變に當つて、我が日東國に、日蓮に時宗といふ二大英傑が、しかも時を同じうして現れたといふ事は、我をして、歴史の深い意味を痛切に覺らしめる。英雄國日本の本色は、かくして始めて世界的に發揚されたのだ。日蓮は言ふまでもなく、日本の生んだ最も偉大な英雄僧の一人である。彼は十二歳で清澄山(二)に入つてから、六十一歳で池上(三)に寂するまで、四十年の間僧服を身に纏つてゐたけれども、彼の身内にたぎる血潮は、政治家のそれであつた。抑、彼をして僧門に入らしめた

(一) 第八十二代。
(二) 第八十三代。
(三) 第八十四代。

(四) 菩薩の一大智慧。慈悲の廣大無窮。な事は恰も虚空か庫藏とする様であるといふ。

ものは承久の亂であつた。何故に、あの戰亂に於て、朝廷方はみじめな敗戦の苦杯を嘗めたのであらうか。何故に後鳥羽^(一)、土御門順徳^(二)の三上皇は、十善の御身を以て隱岐に、阿波に、佐渡に配流せられ給うたのであらうか。天照大神は玉體に入らせ給はざりしか。佛法は國を護らざりしか。國家安泰、玉體安穩の祈は、何故に聽かれなかつたのか。この疑問を胸に抱いた少年日蓮は、十二歳の時、我をして日本一の智者とならしめ給へ^(三)と、虚空藏菩薩に祈を捧げ、この疑問を解決せんが爲に、僧門に入つたのである。

かくして清澄に、鎌倉に、比叡に、南都に、高野に、研學二十年、漸くにしてその疑問は解決した。それは朝廷の罪にあらざ、幕府の罪にあらず、實に國家を守護すべきはずの佛法に誤があつた爲である。佛法亂るゝが故に王法が破れたのだ。日本國をして正路を歩ましめる爲には、先づ佛法を正道に引直さなくてはならぬ。かくして日蓮

は、法華經の行者となつて民衆の前に現れたのである。



辻説法 (野田九浦筆)

さればこそ日蓮は、身は僧形にありと雖も、志は常に日本國の政治にあつた。少くとも彼の宗教は、未來に於ける小なき個人の救濟を約束するものではなくして、現世に於ける大なる國家の改革を要求するものであつた。彼が口を開けば即ち、日本國、日本國と叫んだのは、この爲であつた。

しかも法華經の行者として起つた日蓮は、民衆政治家としての豊かな天分に恵まれてゐた。その雄辯と文章力、その熱情と膽略とは、確かに時代を戰慄させるに十分であつた。彼が鎌倉の小町ヶ辻に現れて、

戰慄する

獅子吼する

末法の世

大道に獅子吼し始めた時、瓦石は彼の頭上に飛んだ。彼は三たび斬られんとし、二たび遠流に處せられた。が、彼はひるまなかつた。

末法の世に法華經の行者が現れ、ば、必ず刀杖瓦石、斬頭遠流の迫害に遇ふであらうといふ佛の豫言を堅く信じた彼は、笑を含んでその迫害に對抗した。彼が身に迫害を蒙つてこそ、佛の豫言は適中するのだ。若し迫害が到らなければ、釋迦は世界一の大虚言者となるであらう。その勇猛心。我等は全日本を向ふに廻して、雄々しくも戦ひ抜いた日蓮のうちに、何れの國の改革者にも未だ見ない壯烈な英雄政治家の姿を見る。彼は實に僧形の政治家であつた。

これに反して時宗は、政治家と言ふよりも、宗教家と言ふにふさはしき人格者であつた。少くとも彼は、空しき政略に腐心するよりも、退いて自らの修養と鍛鍊とに耽り、かくして養ひ得た偉大な人格力を、國家政治の上に擴充せんと志した人物である。彼は少年時

擴充する

(一)鎌倉建長寺の期
山名は道隆、蘭
溪と號し、宋
の弘安元年
九三八年寂
年六十六

(二)鎌倉圓覺寺の開
山名は祖元、無
學と號した。宋
の弘安九年
九四六年寂
年六十一

忽忙

代から大覺禪師に就いて日夜參禪の修行に怠らなかつた。大覺禪師の寂するや、更に南宋より名僧佛光禪師を招いてこれに師事した。さればこそ彼は、蒙古二十萬の大軍が北九州に襲ひかゝつた時、言はゞ陣中忽忙のうちにあつても、悠々と參禪の工夫に耽り、法悦自ら樂しむといふ欣慕すべき高風を養ひ得たのである。

「相模太郎膽養の如し」と頼山陽が詠じて以來、この點に於ける時宗の性格は、多く誤解されてゐる様に思ふ。勿論彼が、長年の禪宗の修養によつて、養の如き膽力を養つてゐた事は疑ないが、彼は決して、この句が暗示する様な、猪突にして專制的な將軍型の人物ではなかつた。寧ろ温厚にして圓滿常に國內の平和と國民の安寧とを意とする平和主義的政治家であつた。この温厚な時宗にして、蒙古の無禮極る牒狀に接した時、猛然として起ち上り、死を以て國家の名譽と、民族の光榮とを守らんとしたればこそ、日本國民はその傳

統的團結力を誇る事が出来たのである。若し時宗が單なる猪突的の一將軍であつたならば、日本民族は單なる好戦國民の名を留めるに過ぎなかつたであらう。時宗の本色は飽くまで、その長い間の



(寫摸料史)蓮

日蓮と、不屈の正義觀とであつた。若し日蓮を政治家的宗教家であつたとすれば、時宗は正に宗教家的政治家であつた。私は日蓮と時宗との肖像を並べ見る時、何時でも運命の皮肉に苦笑せざるを得ない。日蓮の魁偉にして戰闘的な風貌を見よ。そして時宗の溫和にして玉の如き容姿を思へ。一は生れながらの政治家で、他は天生の宗教家である。然るにいかなれば、天は政治家たるべき日蓮を、安房小湊(一)の一漁夫の子に生れしめ、

魁偉

(一)今千葉縣安房郡小湊町、日蓮の誕生を記念する爲、建治二年(一九三六年)に建立された誕生寺がある。

性格悲劇

彼に僧服を纏はしめたのか。何故に運命は、宗教家たるにふさはしい時宗を、鎌倉の營中に生れしめ、彼を執權の座に坐らしめたのか。それは、歴史その物が創り成せる偉大な性格悲劇である。



(藏寺願滿縣本熊)宗時

しかしながら、一方から考へれば、日蓮が政治家的宗教家であり、時宗が宗教家的政治家であつたればこそ、この二大英雄はひそかに相許し、共に別々の立場から、蒙古襲來といふ未曾有の國難に當つて、日本民族の爲に萬丈の氣焰を吐く事を得しめたのである。日蓮と時宗とが會見したのは、僅かに一回に過ぎなかつたが、兩雄は確かに默契する所があつた。「守殿こそは流石に知らしめ給はん」と言つたのは日蓮であつた。

默契する

英雄英雄を知る

「武門にこれを言はゞ、大丈夫と稱するはこの人ならん。」と評したのは時宗であつた。

我等は其所に、英雄、英雄を知るの美しき情景を見る。

本領を發揮する

かるが故に私は二たび言ふ、日蓮と時宗。この二大英雄が時を同じうして現れたればこそ、蒙古襲來といふ大國難は、英雄國日本の本領を發揮する機縁となつたのである。」と。

我等が蒙古襲來の歴史を回顧する時、先づ胸に浮ぶのは、あの有名な「神風」によつて、海上に漂流させられた幾百艘の蒙古の軍船である。そして從來の歴史は、唯簡單に、日本國を救つたものは神風であると教へて來た。

しかし私は、聊か古文書によつて、當時の史實を探究するに及んで、その結論の餘りに輕卒である事を知つた。

勿論、意氣既に日本を呑んでゐた蒙古軍に對して、最後の打撃を

與へたものは神風であつた。それに間違はない。しかし、その前に先づ記憶しなければならぬのは、文永の役に於て、一旦上陸した蒙古軍を、二たび軍船内に退却せしめた日本軍の勇武である。弘安の役に於ては、もつとすばらしかつた。日本軍の果敢な攻撃的防禦は、二箇月に亙つて蒙古の大軍に對抗し、遂に殆ど一兵も上陸する事を許さなかつたのである。

假にあの時、日本軍が造作もなく敗退してゐたと想像せよ。蒙古の大軍は恐らく博多の都會地に根據を占めて、北九州を侵略しつゝあつたであらう。その時偶然神風が起つたとて、それが何になる。人事を盡して天命を待つと言ふ。蒙古襲來の時に當り、日本民族が人事を盡したればこそ、天命は始めて威力を發揮する事が出來たのだ。

當時の蒙古國と言へば、既にドイツ、オーストリアの邊から、ロシ

(1) Siberia (西比利亞)

(2) Alexander

マケドニア王
リッポの子、四方
に遠征し、ギリ
シヤ、シリア、ペ
ルシヤ、エジプト、
印度等を征服し
た。(西紀前三五
六―前三三三年)

(3) 思想家、評論家、
新潟縣の人。明
治八年生。
昭和元年十二月
二十八日踐祚後

ヤシベリヤ、印度を蔽ひ、支那大陸を併呑して、歐亞の二大洲に跨が
る古今未曾有の強大國であつた。その領土の廣き、その勢威の盛ん
なるアレキサンダーの雄圖も、ナポレオンの征旅も、比較にならぬ
大帝國であつた。當時の蒙古は、即ち當時の世界であつたと言つて
も過言でないのだ。
しかもこの大蒙古國が、のしかゝる様に東海の一小島に襲ひか
かつて來た時、我が日本民族が敢然として、面と面とを突合せて立
つた。その健氣なる姿を思へ。

これぞ即ち英雄國日本の姿なのだ。そしてまた、日蓮と時宗とに
よつて、人格化された日本民族の傳統的精神である。
二二 昭和國民の新使命 高島米峯
今上陛下踐祚後朝見の御儀に於て、文武百官に賜はつた敕語こ

朝見ノ御儀ニ於
テ賜ハリタル敕
語
朕皇祖皇宗ノ威
靈ニ頼リ萬世一
系ノ皇位ヲ繼承
シ帝國統治ノ大
權ヲ總攬シ以テ
踐祚ノ式ヲ行ヘ
リ舊章ニ率由シ
先徳ヲ奉修シ祖
宗ノ遺緒ヲ墜ス
無カラシムコト
庶幾フ
惟文武ノ資ヲ以
テ天業ヲ恢弘シ
内教ヲ敷キ外
武功ヲ耀カシ
載不磨ノ憲章ヲ
頒チ萬邦無比ノ
國體ヲ鞏クセリ
皇考夙ニ心ヲ養
正ニ宅キ廼チ志
ヲ繼明ニ尚クモ
不幸中道ニシテ
聖體ノ不豫ナル
朕儲貳ヲ以テ大

そ、實に昭和の劈頭に於ける新政の大宣言である。
謹んで按ずるに、敕語の第一段は、皇位繼承の事を述べさせ給ふ
と共に、我が國體が萬古不易の基礎の上に立つものなる所以を明
らかにせられたものであり、第二段は、明治天皇及び先帝の御芳躅
をたどらせられたものである。第三段は、舉國一體、共存共榮の理想
をお示しになつたもの、第四段は、我が國の國是は、日進と日新とに
ある所以をお示しになつたものである。而して第五段は、浮華を斥
け模擬を戒められたもので、通じてこれを拜讀し奉る時、その叡慮
の崇高で雄大なる、その君徳の至仁で謙抑なる、唯おのづから頭の
下るのを禁ずる事が出來ないのである。

惟ふに、今上陛下遠く皇祖天照大神の神敕に基づき、近く帝國憲
法の定むる所に則り、
萬世一系ノ皇位ヲ繼承シ帝國統治ノ大權ヲ總攬シ

政ヲ攝ス遽ニ登
 退ニ遭ヒテ哀痛
 極リ罔シ但皇位
 ハ一日モ之ヲ曠
 クスヘカラス萬
 機ハ一日モ之ヲ
 廢スヘカラス哀
 ヲ銜ミ痛ヲ嗣ケ
 リ朕ノ寡薄ナル
 唯就業トシテ負
 荷ノ重キニ任ヘ
 サランコトヲ之
 レ懼ル
 輓近世態漸ク以
 テ推移シ思想ハ
 動モスレハ趣舍
 相異ナルアリ經
 濟ハ時ニ利害同
 シカサルヲ國
 此レ宜ク眼ヲ國
 家ノ大局ニ著ケ
 榮國一體共存共
 本ニ不拔ニ培ヒ
 民族ヲ無疆ニ蕃

給ふ事となつた爲に、實祚は無窮に榮え、國運は永遠に展び、九千萬國民は茲に鼓腹擊壤の惠澤に浴する事が出来るのであると思ふと、誠に感激に堪へないものがある。されど明治天皇の偉業を承繼がせられて、専らその紹述に努めさせられた先帝が、中道にして遽に御登遐あらせ給ひ、茲に御孝心深くわたらせ給ふ今上陛下には、
 「哀痛極リ罔シ」
 とさへ悲歎あそばされたのである。かゝる御悲歎の中にも、
 「但皇位ハ一日モ之ヲ曠クスヘカラス萬機ハ一日モ之ヲ廢スヘカラス哀ヲ銜ミ痛ヲ懷キ以テ大統ヲ嗣ケリ」
 と仰せられ、哀しみを銜み痛みを懷き給ひつゝ、しかも雄々しくも立つて、帝位を嗣がせ給ふ事となつたのは、實に國を思ひ民を念ひ給ふ叡慮の然らしめる所であつて、殊に
 「朕ノ寡薄ナル唯就業トシテ負荷ノ重キニ任ヘサランコトヲ之

クシ以テ維新ノ
 宏謨ヲ顯揚セン
 コトヲ懋ムヘシ
 今ヤ世局ハ正ニ
 會通ハ恰モ際張
 人文ノハ際張
 ノ國期ニ膺ル
 我ニ進ムニ在リ
 ニ新シムニ在リ
 而シテニ博ニ
 外ノ史ニニ審
 得進ノ其ニニ
 ミ循ヒヤニニ
 其ノ中ヲ執ル
 ヤ其ノ深キヲ
 是レキ所ナリ
 夫レ浮華ヲ斥ケ
 質實ヲ尚ヒ模
 フ戒メ創造ヲ
 メ運ニ乘リ會通
 以テ更ニ張リ
 啓キ人々心ヲ
 シク民風ヲ同
 ノ化ヲ宣ヘ永ク
 四海同胞ノ誼ヲ

レ懼ル」
 と仰せになつてゐるのは、その御謙徳、誠に拜察し奉るだに、恐懼の至である。
 更に陛下は現代の世相を見そなはせられ、
 「思想ハ動モスレハ趣舍相異ナルアリ經濟ハ時ニ利害同シカラサルアリ」
 と、その推移を指摘あそばされてゐるのであるが、中にも思想界の動搖は、誠に國家の深憂である。これに處するの途、唯
 「舉國一體共存共榮ヲ之レ圖」
 の外にはない。即ちこれ建國の精神であり、維新の精神であり、昭和の精神である。
 由來日本帝國は家族制度の國がらであつて、國家に於ける國民は、恰も家に於ける家族の様なものである。随つて我等國民は、一面

敦クセンコト是
切ナル所ニシテ
不顯ナル皇祖考
ノ遺訓ヲ明徴ニ
シテ承ナル皇考
ノ志ヲ繼述ス
ル所以存ス
其ニ以テ朕カ
ヒ皇考ニ效セシ
所ヲ以テ朕カ躬
ヲ巨躬シ朕カ躬
ヲ獎順シ朕カ躬
ヲ民ト寶祚ヲ扶
窮ノ寶祚ヲ扶翼
セヨ

に於ては陛下の忠良な臣民であると共に、一面に於ては陛下の可憐な赤子である。義ハ君臣ニシテ情ハ父子」といふのは、日本に於てのみ始めて言得る尊貴な事實であつて、

「國本ニ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ維新ノ宏謨ヲ顯揚するものも、全くこの賜でなくてはならない。」

然るに今や世界に國するもの、その關係次第に複雑となり、我の害と他の利と、彼の長と此の短と、互に會通するを要する時である。この際に當り、我が國の國是は、日に進み日に新たなるものでなければならぬ事、もとより言ふまでもない。さりとして、急進を是とする事は出来ない。と言つて、保守を可とするわけにも行かない。専ら中庸を執つて、世界人としての日本人の進むべき方向を誤らしめたくないといふ大御心からして、特に

「博ク中外ノ史ニ徴シ審ニ得失ノ迹ニ鑒ミ進ムヤ其ノ序ニ循ヒ

新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ」と仰せになつたのではあるまいか。

最後に、

「浮華ヲ斥ケ質實ヲ尙ヒ」

と仰せられたのは、「浮華放縱ヲ斥ケ質實剛健ニ趨キ」とある先帝の遺詔に據らせられたものであつて、更に

「模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ日進以テ會通ノ運ニ乘シ日新以テ更張ノ期ヲ啓キ人心惟レ同シク民風惟レ和シ汎ク一視同仁ノ化ヲ宣ヘ永ク四海同胞ノ誼ヲ敦クセンコト是レ朕カ軫念最モ切ナル所」

と仰せになつたのは、即ち昭和新政の宣言中の大眼目で、殊にその模擬を戒め創造を勗めよと仰せられたのは、正に國民の頭上にお降しになつた一大警策である。顧れば過去の日本は、餘りに歐米文

軫念

警策

糟粕を嘗める

化の糟粕を嘗めるに急であつて、却つて祖國精神を傷つける様な事さへなかつたとは言はれない。何時までも外國追隨歐米模倣より脱出し得ないといふのは、斷じて雄邦日本の面目でない。識者は既に西洋文明の没落を豫言して、東洋文化の興隆を期待してゐる。我等日本國民は先づこの點に著眼し、昭和の新文化を創造して、以て四海を光被するの大覺悟がなくてはならない。これ即ち昭和國民の新使命であつて、やがて今上陛下の聖旨を奉戴する所以である。

國文實業學校用卷八終

浦野製



有所權作著

昭和八年五月八日印
 昭和八年五月十一日發
 昭和八年十二月五日訂正再版印刷
 昭和八年十二月八日訂正再版發行

國文實業學校用卷八

定價金五拾六錢

著者 富山房編輯部

東京市神田區通神保町三番地

合資會社 富山房

發行者兼 代表者 坂本嘉治馬

東京市小石川區音羽町六ノ二九

印刷所 富山房印刷部

發行所

東京市神田區通神保町三番地
合資會社 富山房

電話神田二、一七一—二、一七八番
振替口座東京五〇一—番

